琴湖岳遺跡

（十三小学校線道路改良工事に係わる事前発掘調査）

1988．3．31

青森県北津軽郡市浦村教育委員会

序　　文

琴湖岳遺跡からは、早くからいろいろな出土物が発見されています。中国製の青磁・白磁はもちろん、国内の著名な陶器が沢山発見されている遺跡であります。

また、畑地からは猛火をかぶったと思われる焼石が大量に出るなど、いつの時代か家並がぎっしり軒を並べていたのではないかと、考えられていました。

今回、この遺跡の一部に十三小学校通学路工事が施されることになり、文化財保護の立場から、専門家に依頼し遺跡の調査をお願いすることとなりました。

幸いに、団長の新谷雄蔵氏をはじめとする調査団員のかたがた、地元十三地区のかたのご尽力とご協力により、順調に調査が進められ、予期以上の成果が得られることになりました。

また、この遺跡が私どもが想像していた以上の重要な遺跡であることも判明いたしました。この成果がこの報告書にまとめられて刊行されますことを、関係者一同の深く喜びとするところであります。

ここに、この調査に関係されたかたがたに感謝の意を表するとともに、この調査報告書が広く活用されることを願う次第であります。

昭和63年３月

市浦村教育委員会
教育長職務代理者　葛　西　安十郎

目　　次

○序　文
目　　次
○〔特別寄稿〕
琴湖岳遺跡に憶う……市浦村史編纂委員長　豊島　勝蔵 …… 5
○例　言
○写$_{1}$～$_{6}$（発掘スナップ、出土状況、遺構）…… 8
第１図・琴湖岳遺跡付近地形図（付瀬戸鉄釉三耳壺写真、実測図）…… 14
第２図・琴湖岳遺跡グリット・トレンチ配置図…… 15
第３図・琴湖岳遺跡・基本層序図…… 16
第４図・R$_{27}$ 西壁セクション図…… 17
第５図・R$_{22}$ 西壁セクション図…… 17
第６図・R$_{28}$ 東壁セクション図…… 18
第７図・X$_{3}$＋R$_{27}$ グリット「寺院址」？実測図…… 19
第８図・R$_{28}$ グリット「火葬台址」実測図…… 20
第９図・X$_{5}$＋R$_{21\cdot 22}$ グリット　「豪族居館址」？実測図…… 21
第10図・Y$_{1}$＋R$_{26}$ グリット「配石遺構」実測図…… 22
〔Ⅰ〕発掘経過と発掘要項抄・基本層序…… 23
〔Ⅱ〕検出遺構（柱穴群・溝状遺構・配石遺構・寺院址？火葬台址・豪族居館址？等）… 25
〔Ⅲ〕出土遺物（陶磁器・木製品・鉄滓・鉄製品・貝類・土錘・古銭・骨類）…… 31
〔Ⅳ〕若干の問題点（考察にかえて）…… 33
☆参考文献
◎P.L$_{1}$～P.L$_{28}$ …… 35

特　別　寄　稿

琴湖岳遺跡に憶う

市浦村史編纂委員長　豊　島　勝　蔵

琴湖岳遺跡とは、北津軽郡市浦村大字十三の古中道、通行道、琴湖岳の三字名を有する一帯の原野（畑地）を総称した広汎な地域を指し、昭和59年『市浦村史』第一巻出版に際し、筆者が一字名をとって初めて命名したものである。換言すれば、北は俗称琴湖岳なる大土堤と、西は字深津東丘、南は檀林寺遺跡の小土堤とに囲まれた地域に当たる。東側は十三湖（字土佐）岸である。

この遺跡一帯からの出土品はおびただしく、五輪塔、茶臼、御正体、仏具片、人骨、中国銭、礎石（檀林寺遺跡）はもちろん、早いものは十三世紀、十四世紀から近世までの陶磁器片（内中国龍泉窯の完形青磁２枚）が出土した地域であり、十三湊安倍安藤氏と深い関係を持った遺跡で、江戸時代まで存続した遺跡の可能性が提唱されてきたのである。

さて、十三小学校線道路改良工事の事前調査として、往昔の古街道（現中街道）を新谷雄蔵氏を主任に、北奥文化研究会員、村関係当局各位により、昨年８月、本年３月からと発掘が実施され、大規模な中世から近世にかけての集落跡が確認され（詳細は本報告を精読せられたい）、それを裏づける文献を書くように命ぜられた。本遺跡に長年執念を燃やしてきた筆者として、こよなき喜びと共に光栄に存じ、新谷氏の報告内容との齟齬をおそれながら以下に述べることにする。

資料㈠『十三往来』（伝弘智法印著、中世文書）

「西ハ滄海漫々トシテ、夷船京船群集シ、並ベ艫先ヲ、調フレ舳ヲ、湊ハ成スレ市ヲ」「新町ハ並ベレ棟ヲ接シレ軒ヲ、造リ数千万之家ヲ、商人売買任シレ心ニ、民之竈ハ烟賑フ」（句読訓点筆者）

前段は十三湊の殷賑の状況で、北方から蝦夷地の夷船、南方から上方の京船が群集し、それぞれの交易品の売買で湊は市をなしているというのである。現十三方面の景物を謳歌していることに間違いなかろう。津軽船も当然集まっているとみたい。十三湊安倍安藤氏管制下にあったことはいうまでもなく、当遺跡の出土品と大いに関係するものである。後段の「新町」については、現相内説と十三説があったが、故工藤規氏（筆名杜堂、元東奥日報社長）を中心とする十三史談会は、あくまでも現琴湖岳遺跡を主張してきたのである。このたびの発掘で筆者たちの主張が確証づ

けられたものと意を強くしている。

安藤氏没落後、浪岡北畠氏の治下にあったらしく、現十三湊迎寺には北畠氏の勧請した稲荷社（伝承、排仏毀釈で廃社、後に現天満宮）があることを付加する。

資料㈡『青森県史』所収

(1) 明暦３年（1657)「11月13日（或は17日と云ふ）十三湊町出火町家不残焼失是迄は豪富家も多有之且米穀并下之切厚子山初諸山材木等多湊山有之故船之通路不絶繁昌之処此以後逐年衰微に至といふ」(『佐藤家記』)

(2) 万治３年（1660)「６月27日十三出火」（『津軽藩日記』)

(3) 寛文元年（1661)「10月10日今夜四ツ時分より十三火事翌日迄焼家80余」(『津軽藩日記』)

同遺跡の表面の石は殆ど焼石であり、出土遺物に近世陶器がある等、当遺跡が安倍安藤氏から、おそらく明暦の大火以前まで存続していたものではなかろうか。十三湊の市街地がこの遺跡の上にあったものと推測される参考として掲げた。

元来、中世の安倍安藤氏の居舘および寺院神社の跡は現市浦村相内ならびに脇元地区に多く所在し、十三地区には民衆の家並が軒を接していたことが窺われる。この度の当遺跡の発掘によっての大邸宅跡は豪商の邸宅と推測されるし、もちろん寺院跡が出現しても一向差支えがない。伝檀林寺跡の確認がそれを実証している。

要するに、当遺跡は、中世から近世にかけての十三湊の町家の聚落、寺院のあったところと強く確信するものである。

例　　言

(1)　この報告書は、市浦村教育委員会が、昭和62年８月５日～８月12日（夏)、同年11月20日～11月26日（秋)、および、昭和63年３月22～３月31日（春)、同年４月１日～４月６日（春）にわたって発掘調査した「琴湖岳遺跡」の調査記録である。

(2)　本遺跡の発掘調査中、検出した遺構の理解に関して、東北大学坂田泉氏、東北学院大学加藤孝氏の指導助言をいただいた。また、出土した骨類の鑑定は、早稲田大学金子浩昌氏に依頼し、その結果をいただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

(3)　出土した陶磁器類については、浪岡町教育委員会工藤清泰氏の指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる次第である。

(4)　また、いわき市教育文化事業団高島好一、埋蔵文化財発掘調査研究所佐藤智雄（在仙台市)、群馬県埋蔵文化財調査事業団飯島義雄の各位には参考資料、および御指導、助言を賜った。心から感謝申し上げる次第である。

(5)　本報告書の執筆・編集は新谷雄蔵が担当した。グリット、トレンチの断面図等は、調査員永沢秀夫、太田文雄、小山英治、山川夏子が担当した。また、地学に関する事項は、調査員伊藤昭雄が担当し、発掘グリット、トレンチの配置、測量、遺構の実測は、市浦村役場建設課、一戸俊一・近藤昌浩・石岡和人・佐藤勝秀が春・夏・秋の発掘において担当した。

(6)　本発掘の進行・資材の整備、庶務一切は、市浦村教育委員会が主管した。

◎事務局（教育委員会）

☆教育次長　葛西安十郎・成田義正・大沢丈徳・小笠原俊治・葛西達也

○派遣社教主事　工藤　　明

(7)　出土遺物は、陶磁器、鉄滓・鉄製品、木製品、骨類、古銭、土錘等であるが、建築中の資料館（正式名称未命名）に展示し歴史研究の資料に資する。

写1

〔発掘隊と発掘スナップ〕

①春の発掘隊メンバー

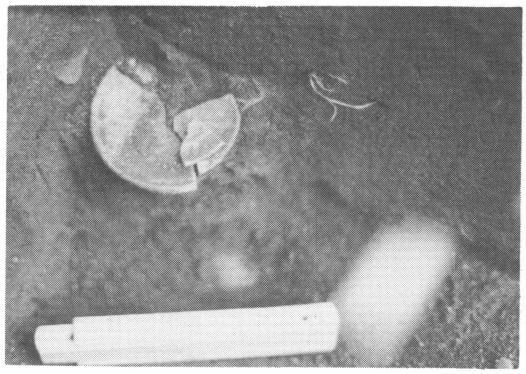
②春の発掘
☆路面を掘る小型ユンボー

③春の発掘
☆掘り過ぎないように見守る発掘メンバーの一人。

④春の発掘
☆R（道）－$_{17}$Ⅲ層上で落込み検出、サブ・トレンチを掘る作業員。

写2

〔遺物の出土状況〕

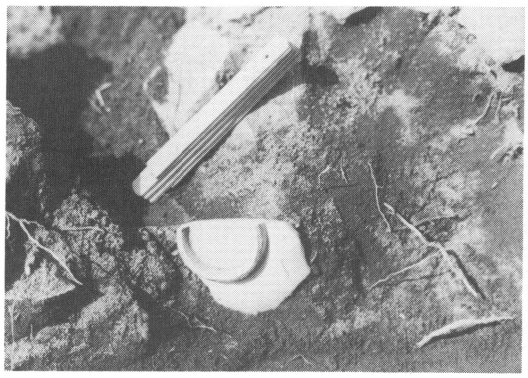


①春の発掘

☆R（道）－$_{28}$、Ⅱ層上面－南東隅出土の瀬戸灰釉小皿の出土状況。

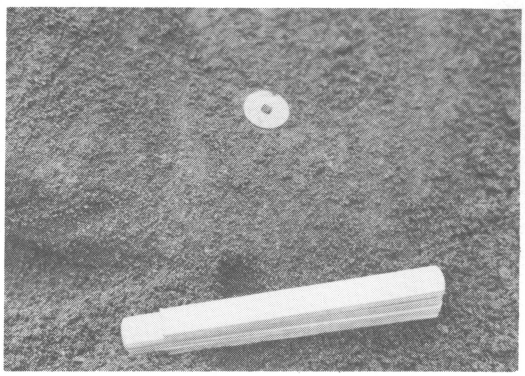
②春の発掘

☆R$_{19}$グリットⅡ層下面での青磁碗底部破片、（蛇の目）が見える。



③春の発掘

☆X$_{3}$＋R$_{27}$グリットⅡ層下面における磁器碗底部破片。（近年）



④春の発掘

☆X$_{3}$＋R$_{27}$グリット、（寺院址？）西壁下の帯状列石下（Ⅱ層下）で検出した「寛永通宝」、

〔遺構の検出状況〕その1

①春の発掘　（第10図参照）

☆Y_1＋R（道）－$_{26}$、Ⅱ層上面で検出した「配石遺構」のようす。

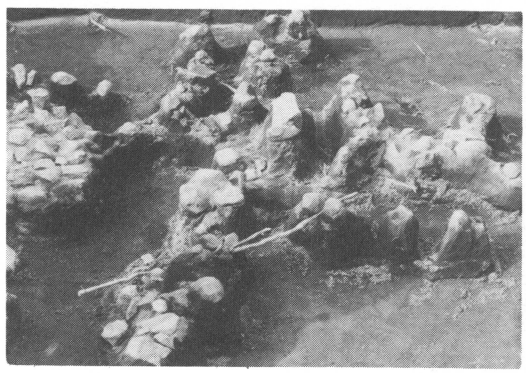
※南壁－西壁が見える。

• 東より写す。

②同上

☆西壁－北壁が見える。

• 東より写す。



③同上

☆グリット中央付近

• 東より写す。

④春の発掘

☆R（道）－$_{21}$、Ⅲ層上面、西南壁下の砕石集積遺構のようす。

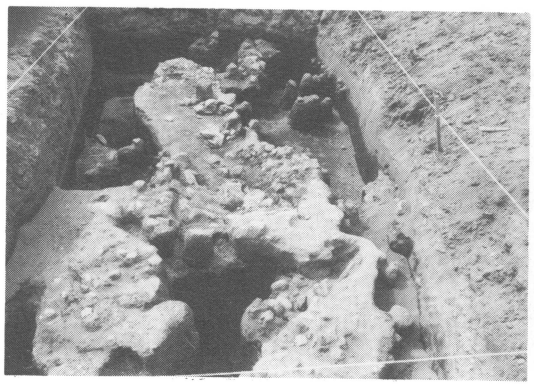
写4

〔遺構の検出状況〕その2

①春の発掘　（第8図参照）

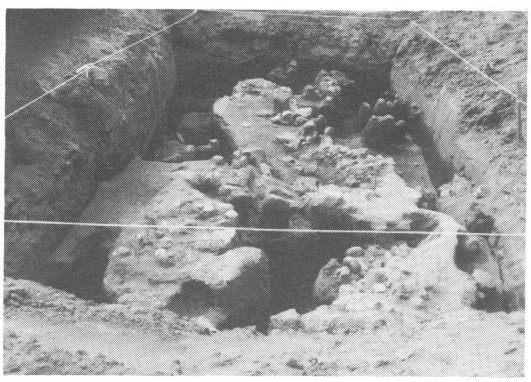
☆R（道）－$_{28}$、Ⅱ層上面で検出した「火葬台」の状況。

• 南方より写す。



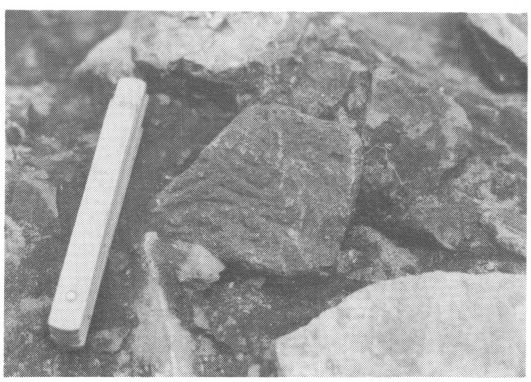
②同上

• 北方より写す。



③同上

• 北方より写す



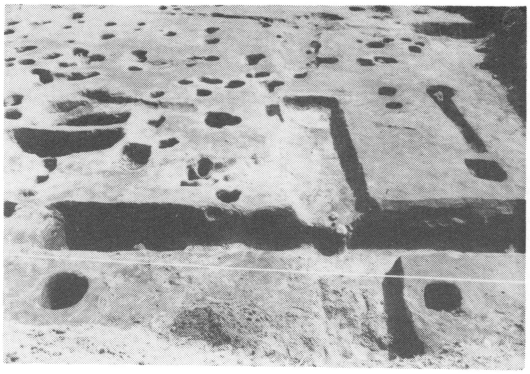
④同上

☆「火葬台」北端に位置した「線刻石」

※「線刻石」の右上、その他に見えるのが焼けた粘土。

写5

〔遺構の検出状況〕その3

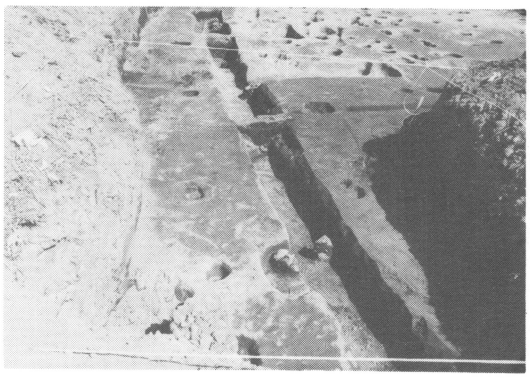


①春の発掘　（第9図参照）

☆R（道）$-_{21\cdot22}+X_{5}$（拡）における
Ⅲ層上面の「豪族居館址」？と推定される遺構、

☆写真の右上方が出入口と考えられる。

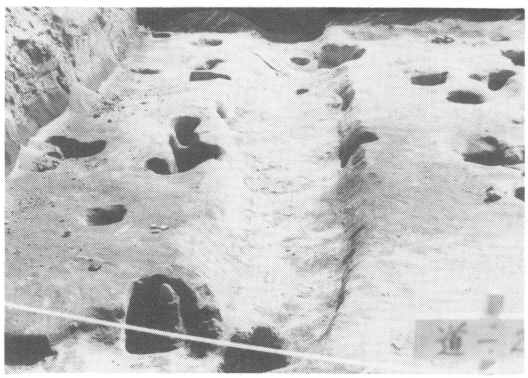
• 西方より写す。



②同上

☆同上遺構の西側を南北に伸びる周構の状況、さらに北方（写真上）へのびる。
下方は、R（道）$_{21}$グリット

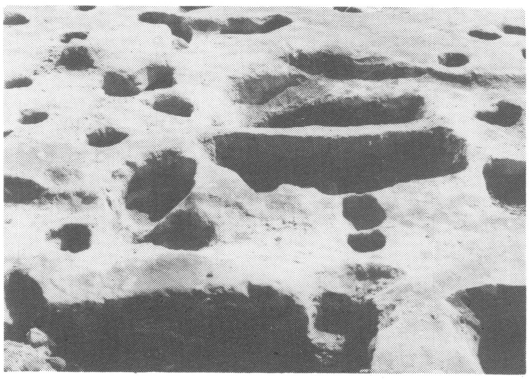
• 南方より写す。



③同上

☆「豪族居館址？」の北壁付近のようす。浅い溝で東・北・南を区画し、東西にのびる浅い溝は、周溝に連結している。

• 西方より写す，



④同上

☆①写真の中央右　（北西付近のアップ、）柱穴群と、大きい「火たき場」が見える「焼けた粘土」が中から出土した。

※柱穴群は、「居館址」以降のものと考えられる、

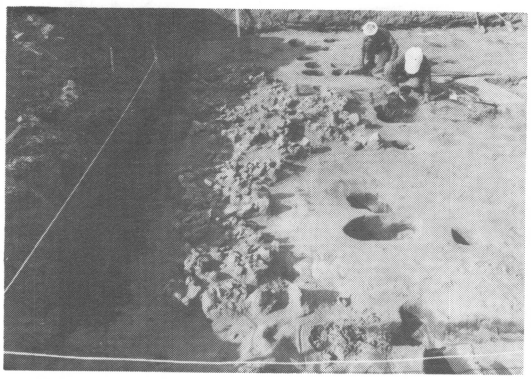
写6

〔遺構の検出状況〕その4

①春の発掘　（第7図参照）

☆X_3＋R（道）27グリットの発掘スナップ（遺構の追求→Ⅲ層上）

・南西より写す。

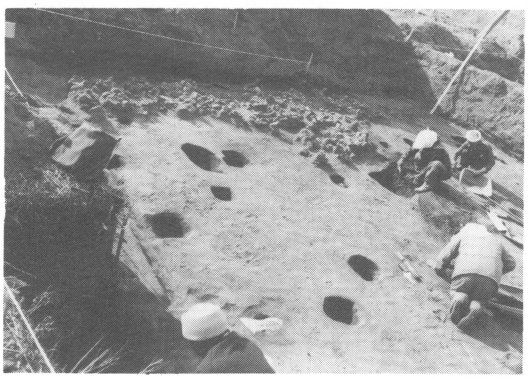


②同上

☆X_3＋R（道）27グリットの遺構精査中（西壁付近）

☆西壁下に南北にのびる帯状石群が見える。（Ⅱ層下）

・南方より写す。



③同上

☆同上グリット中央部付近

※方形柱穴と円形柱穴が並び東西にのびている。この柱穴配置から「寺院址」と推定される。

※帯状にのびる石群下（Ⅲ層）に溝状遺構が南北にのびていた。

・南東より写す。

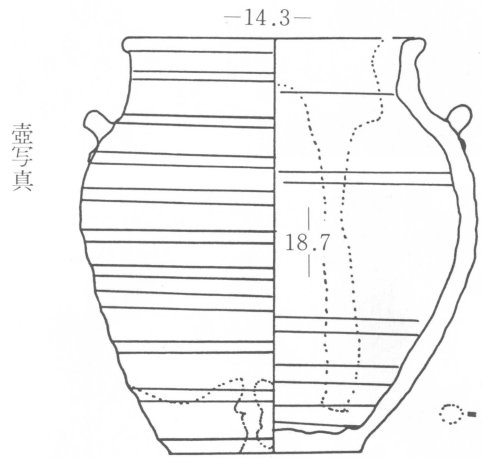
④同上

☆帯状礫群の一部分アップ

※この遺跡は、すべて砂地であるから、なんらかの意図で、他から運び込んだものである。（Ⅱ層下）

〔第１図〕遺跡付近地形図

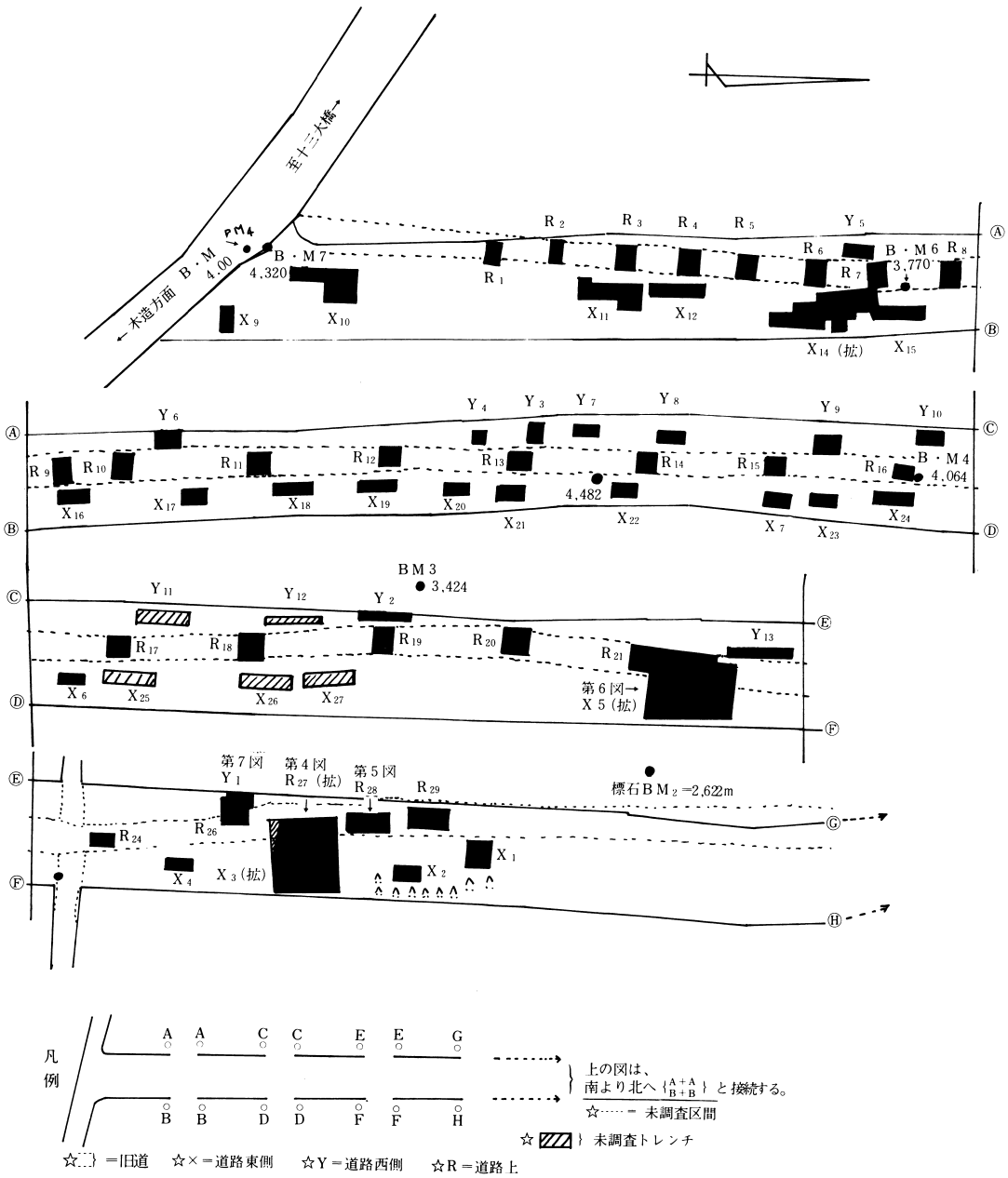
〔瀬戸鉄釉三耳壺〕→15世紀（X_{14}Ⅱ下出土）



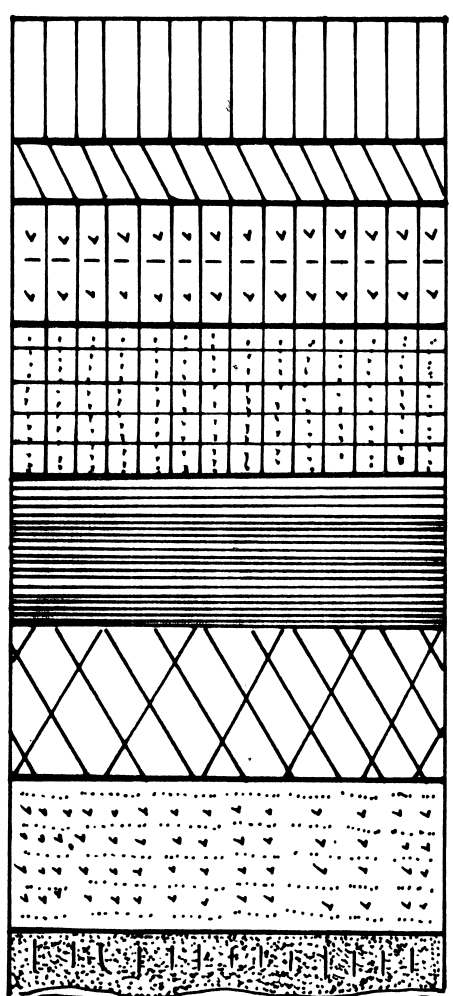
壺写真

壺実測図

〔第２図〕グリット、トレンチ配置図　$S=\frac{1}{500}$

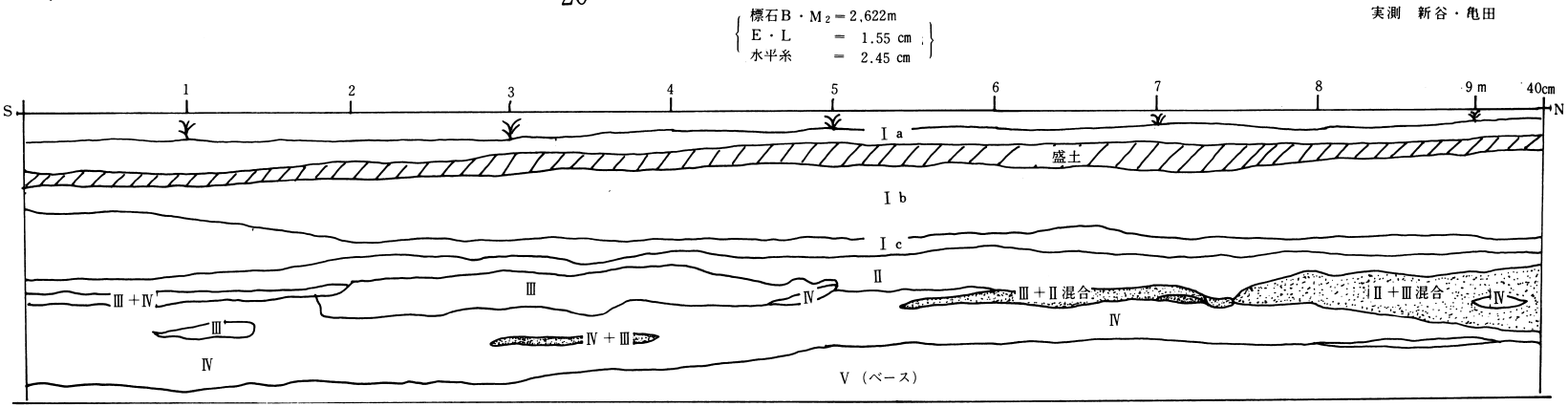


〔第３図〕琴湖岳遺跡基本層序図



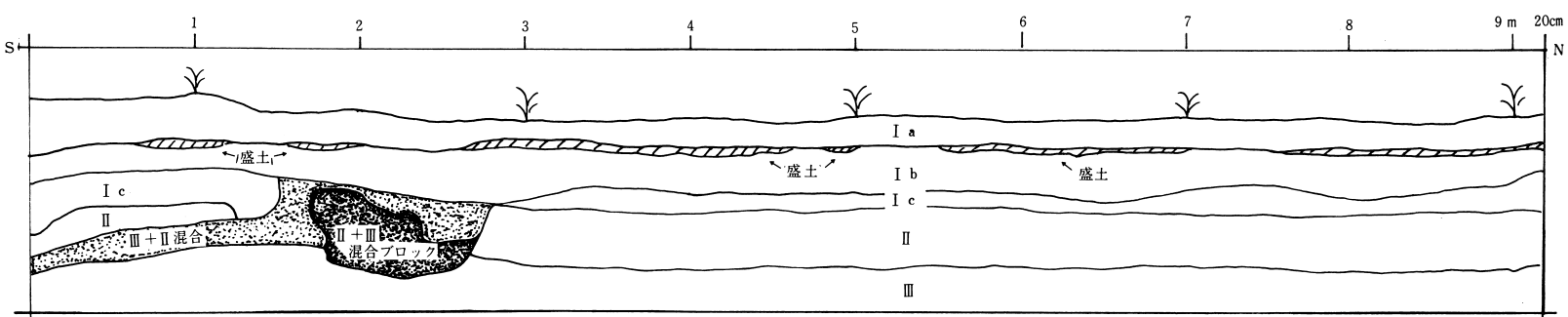
Ⅰ	20～40cm	○灰褐色土（表土） ●道路面であり砕石を多量に含み堅い。
	5～20cm	○黄褐色土（盛土） ●粘土質ロームで団塊をなし、粘質なし。
Ⅰ	20～40cm	○黒褐色砂質土 ●Ⅰａ層と同質なるも、ローム質黒土の混入少量あり、湿性なし。
Ⅰ	40～60cm	○灰黒色砂質土 ●Ⅰａ層と同様なるも、ローム質粘土を中程度含み粘質ややあり。粒子こまかく、しまりがある。
Ⅱ	30～60cm	○黒色砂質土 ●均質ロームを多く含み、粘性があり、有機物を含む砂質土で、主包含層である。
Ⅲ	20～40cm	○赤燈色砂 ●中粒砂層で、Ⅱ層とⅣ層の漸移層である。湿性少なくサラサラしている。
Ⅳ	30～40cm	○赤褐色砂 ●粒度が大で粗粒砂である。粘性、湿性ともにないが、ややしまりがある。
Ⅴ	60～α	○赤緑色粗砂 ●粒度が大で粗粒砂である。水分を多く含み湿性大である。汀線砂と同質と思われる。

〔第4図〕 R_{27}、西壁セクション図　$S=\frac{1}{20}$



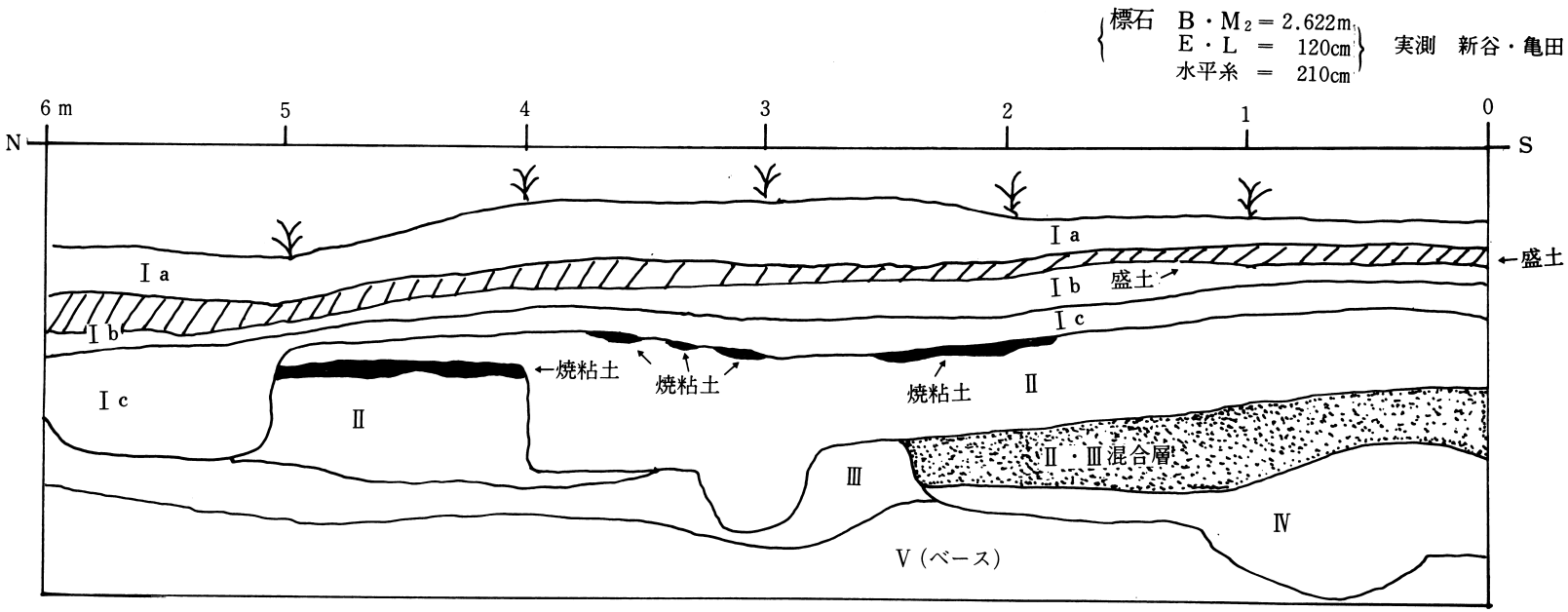
{☆Ⅱ＋Ⅲ、Ⅳ＋Ⅲ→混合層で左側が主体}

〔第5図〕 R_{22}西壁セクション図　$S=\frac{1}{20}$



{☆Ⅲ＋Ⅱ、Ⅱ＋Ⅲ→混合層で左側が主体}

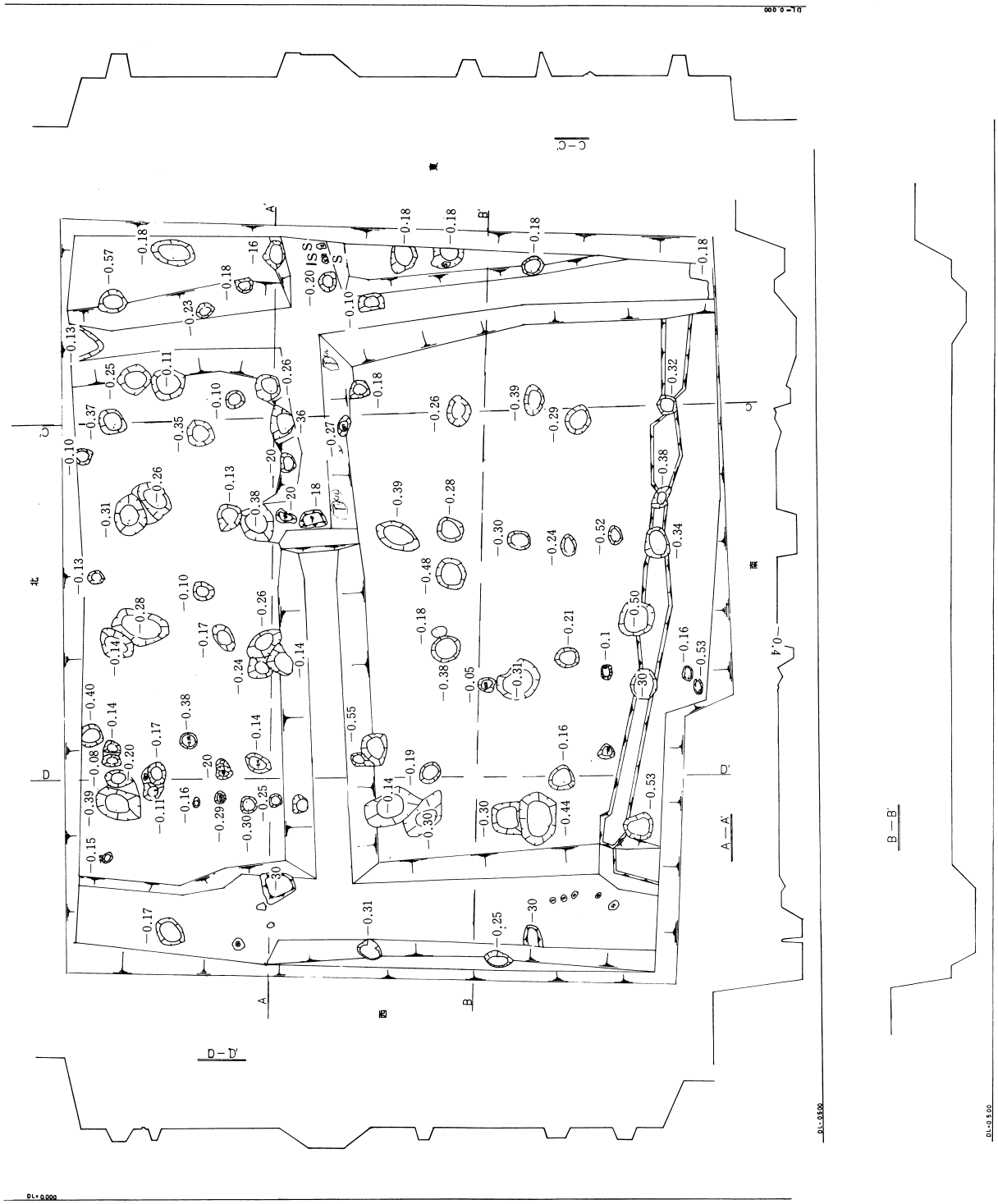
〔第6図〕 R_{28}－東壁セクション図　　S＝$\frac{1}{20}$



{☆Ⅱ＋Ⅲ→混合層で、Ⅱ層が主体}

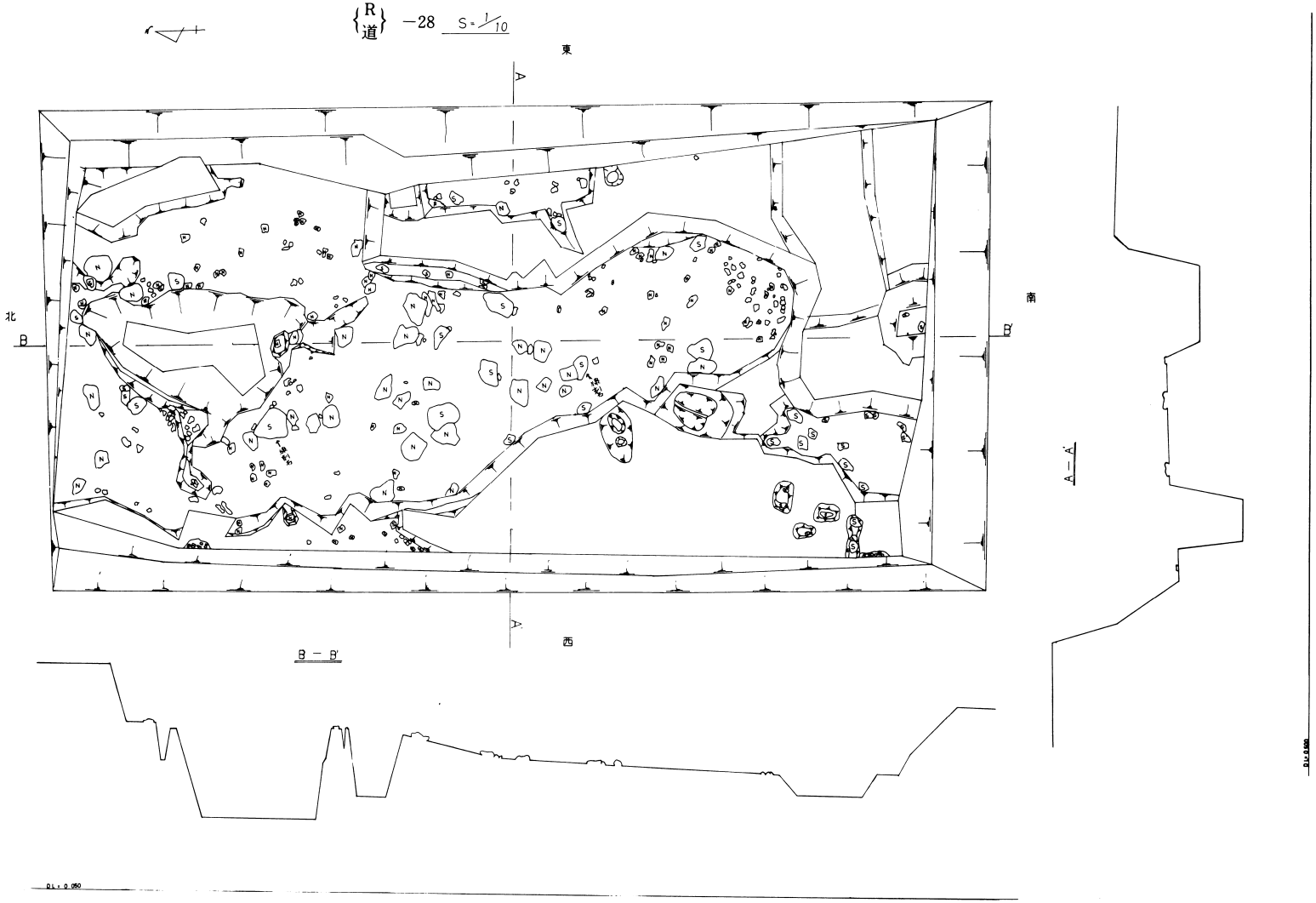
〔第７図〕 X_3＋R（道）$_{-27}$検出〔寺院址？〕　実測図S＝ $\frac{1}{20}$

実測者　一戸・近藤・石岡・佐藤



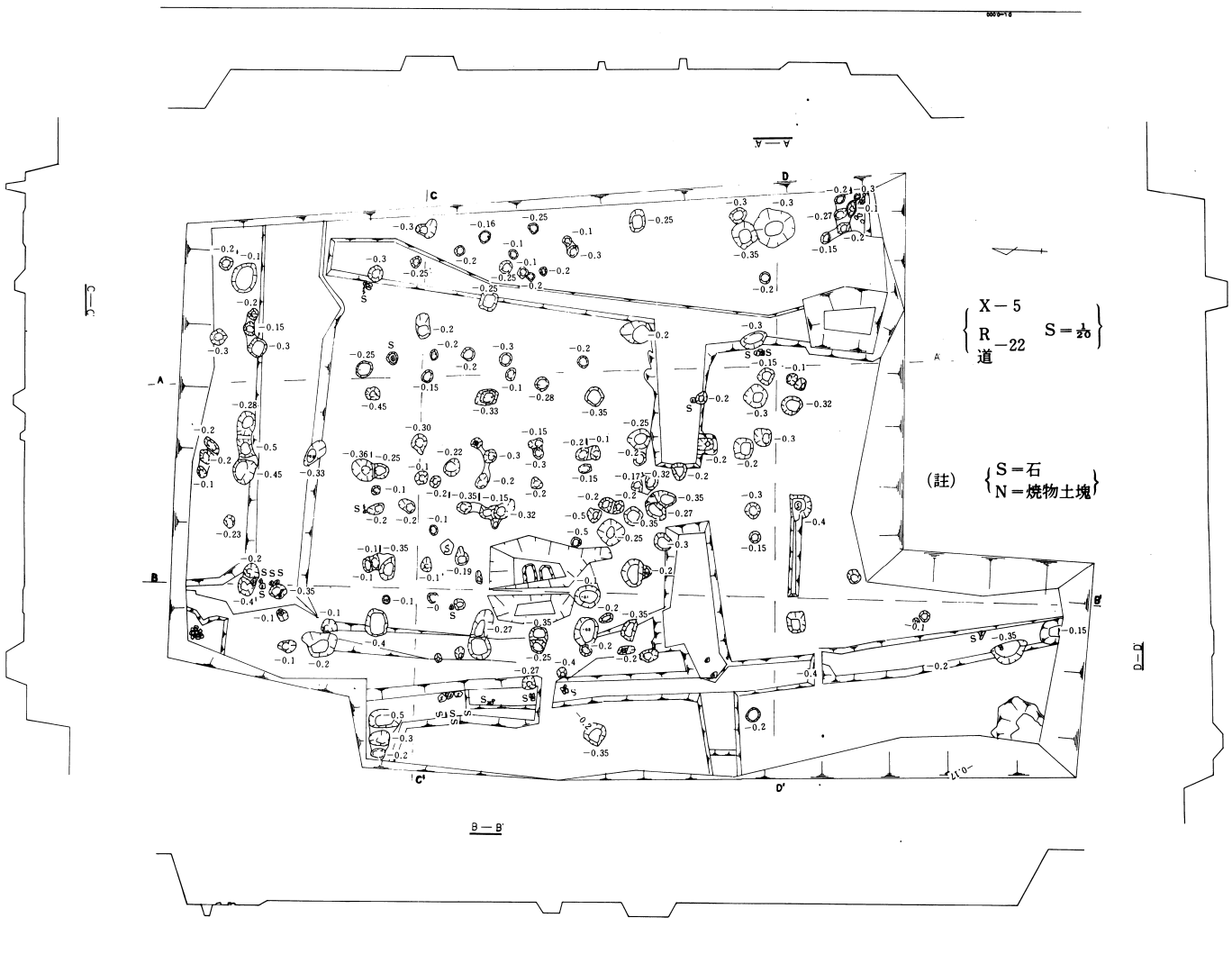
〔第８図〕「火葬台地」実測図

実測　一戸、近藤、石岡、佐藤



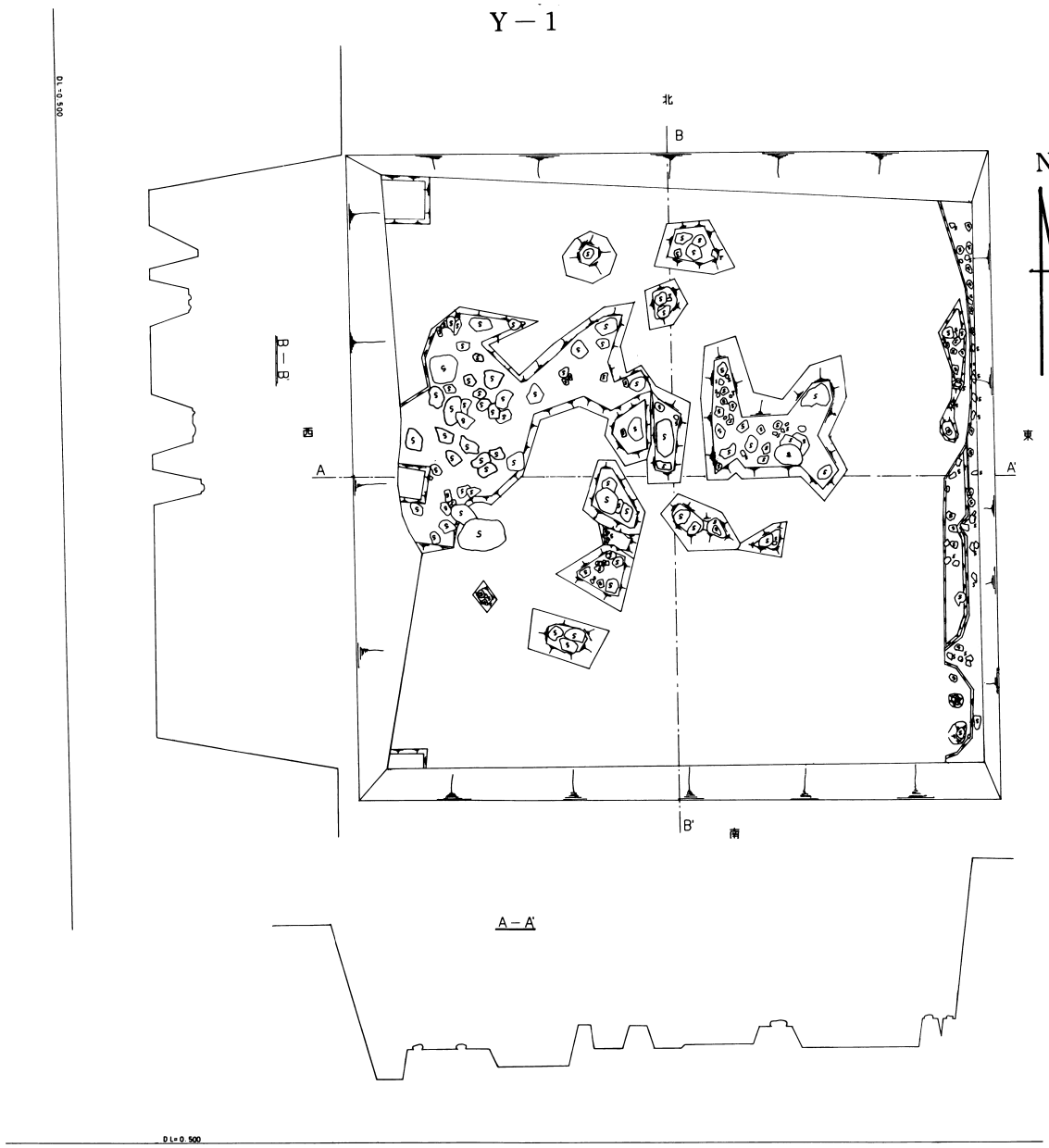
〔第９図〕「豪族居舘址」？実測図

実測　一戸、近藤、石岡、佐藤



〔第10図〕「配石遺構」実測図　　S＝$\frac{1}{10}$

実測　一戸、近藤、石岡、佐藤



〔Ⅰ〕 発掘経過と発掘要項(抄)→{第1・2・3図}

⊙発掘要項→発掘は、例言の項で述べたとおり、夏（S62・8・5日～8・12日)、秋（S62・11・20日～11・26日)、春（63・4・1日～4・6日）の3期に分けて実施した。

⊙発掘面積→3期を合計して、Y地区101㎡、X地区548㎡、R地区288㎡、計937㎡である。（第2図参照)

⊙遺跡の所在地→青森県北津軽郡市浦村大字十三字琴湖岳地内に所在する。

この琴湖岳遺跡は、地形的に見ると西に「前潟・内湖・明神沼があり、東に十三湖があって、この両者に挟まれた農道（古通行道）がある。この農道は、西・および東側は、畑地となっており、一部に松林が続いている。

標高は、この農道の南端、すなわち幹線道路と接する地点で、K・B・M=約4m、北端で、標石B・M=2.26m、発掘区間の中央部でK・B・M_4=4.06mであるが、これは農道上の標高であり、一段低くなっている畑地では、K・B・M_3=3.42mを計った。

すなわち、西の湖沼、東の十三湖に挟まれた低地帯である。（第1図参照)

⊙発掘経過→この農道の西側にYグリット（トレンチ）11か所、東側にXグリット（トレンチ）22か所、農道上にR（道）グリット、29か所を設定して発掘することに計画した。

発掘法は、グリット法とトレンチ法を併用することにした。その理由は、耕作物の状況、交通関係、予定道幅と農道との重複関係等々のためである。

そのため、夏はX_1～X_9、Y_1～$_5$、を発掘、秋は、R_1（道）～R_{16}、春は、R_{17}～R_{29}、X_{10}～$_{27}$を掘ることにする。すなわち、X、Yは、北より南へ、また、南より北へと逆順に発掘したのである。(Rグリットは南から北へ番号順に発掘した。)

☆〔基本層序〕→（第3図)

基本層序は、X_1グリットの東壁を観察した結果を中心に、他のグリットのセクションの状況を合わせて作成した。

琴湖岳遺跡の基本層序は、第3図に示すとおりであるが、基本的には、第Ⅰ層→表土（灰褐色土－砕石を含む)、第Ⅱ層→粘土質均質ロームを含む黒色砂質土、第Ⅲ層→赤燈色中粒砂（Ⅱ、Ⅳ層の漸移層)、第Ⅳ層→赤褐色中粒砂、第Ⅴ層→赤緑色粗

粒砂（ベース）である。

この基本層序に、北西風による新期砂丘砂が混入して、第Ⅰ層がａ・ｂ・ｃに分けられる。

基本層序は、第３図に示すとおりであるがＲ（道）グリットでは、盛土層が加わる。

〔Ⅱ〕 検出遺構の総括→(第2・7・8・9・10図)

⊙柱穴状pit、溝状遺構は、発掘グリット・トレンチのすべてから検出された。紙数が少ないので、その詳細を述べることができないのが残念であるが、以下に概略を述べる。

⊙〔遺構検出グリット・トレンチ表〕→(第2図)

○ ○

⊙X_1 →溝状・pit・ 骨片

⊙X_3 →溝状・寺院址？・pit・

⊙ { X_5 / R_{27} } →溝状・豪族居館址？・

⊙X_7 →溝状・

⊙X_9 →pit ・

⊙X_{11} →pit ・井戸・

⊙ { X_{14} / $R_{7-A・B・C区}$ } →溝状・pit・配石

⊙X_{16}→pit・T字形pit・土壙、

⊙X_{19} →pit・粘土堆・溝状・

⊙X_{21} →溝状・pit

⊙X_{23} 溝状・pit・小土壙・

⊙X_2 →pit

⊙X_4 →pit・溝状

⊙X_6 →溝状・pit

⊙X_8 →pit

⊙X_{10}→ pit・溝状・住居址・土壙

⊙X_{12} →溝状・pit

⊙X_{15} →溝状・

⊙X_{17} →pit・焼粘土堆

⊙X_{20} pit・

⊙X_{22} →溝状・pit・土壙

⊙X_{24} pit

○ ○

以上、22か所、を検出した。次にYグリット・トレンチでは、Y_1～Y_{13}のうち、10か所で遺構を検出した。それを示すと下記のとおりである。

⊙Y_1 →配石・列石・(半円形配石)

⊙Y_3 →pit・

⊙Y_6 →小土壙

⊙Y_8 →配石(半円形配石)

⊙Y_{10} →pit・生粘土

⊙Y_2 →pit・

⊙Y_4 →pit

⊙Y_7 →溝状

⊙Y_9 →pit

⊙Y_{13} →壁面pit

○ ○

〔Rグリット検出遺構〕

⊙R_4 →pit
⊙R_6 →pit
⊙R_8 pit
⊙R_{10} →pit
⊙R_{12} →生焼け粘土、pit
⊙R_{14} →溝状・礫群・pit
⊙R_{16} →溝状・
⊙R_{18} →pit
⊙R_{20} →pit
⊙ R_{27} →
X_3 →列石群・溝状・寺院址
⊙R_{29} →溝状・焼粘土

⊙R_5 →pit
⊙ R_7
X_{14} → 住居址石組み遺構・溝状・pit
⊙R_9 pit
⊙R_{11} →pit ．小土壙
⊙R_{13} →配石・溝状
⊙R_{15} 溝状・pit
⊙R_{17} →溝状
⊙R_{19} →溝状・礫群
X_5
⊙ R_{21} →礫群・豪族居館址
R_{22}
⊙R_{28} →pit ．火葬台
Σ21か所

以上のとおりである。全発掘区60か所のうち、pit ・溝状遺構、列石、配石、礫群等の検出した箇所（53グリット・トレンチ）である。

〔溝状遺構〕→これらの各遺構のうち、溝状遺構は、グリット外に、いずれも延長しているものであり。

この遺構は、すべてⅢ層上面において検出した。すなわち、溝状遺構を設置した人々は、このⅢ層上面を生活面としていたのであろう。

⊙〔生活面〕〔pit →柱穴〕→X・Y・Rにおいて検出した柱穴状pit は、①Ⅱ層上面で確認したもの、②Ⅲ層上面で確認したもの、③Ⅱ層より打込んだものでⅢ層上面で確認したものの、①②③に分けられる。

このことからⅡ層上面にも生活面があったことが理解される。そして、遺物の主包含層は、Ⅱ層であった。

⊙上に記した遺構のうち、住居址（X_{10}）、寺院址？（X_3＋R_{27}）、豪族居館址？（X_5＋$R_{21・22}$）は、第Ⅲ層上面（後述）である。他は、火葬台（R_{28}）を含めて、すべてⅡ層上面であった。

また、Ⅲ層上面検出の遺構（住居址・寺院址？豪族居館址？）において、その柱穴の配置状況、遺構の切り合い状態から、新・旧の遺構が認められる。

すなわち、Ⅲ層検出の遺構は、さらに2期に分けられるようである。

⊙〔住居址・豪族居館址？寺院址？配石遺構・火葬台址〕

1.〔住居址〕→①住居址（X10）、①とした1号住居址は、X_{10}グリットⅢ層で検出したが完掘せず、柱穴と壁面の北側・東側一部、および床面の一部を検出した。

②住居址（R_7、R_7A・B・C、X_{14}拡）→この②、2号住居址は、R_7グリットの北東壁隅Ⅱ層下位で一部を検出、そのためR_7A・B・C区を拡張し、さらにX_{14}グリット、X_{14}拡張区を設定して追跡した大住居址である。

この2号住居址は、R_7グリットの北東隅下より同グリットの西側に溝状遺構がのびており北東隅よりR_7A・B・C区～X_{14}へと子どもの頭大の列石が約12m（幅約80～1m）、斜行して続く列石を有する住居址である。(実測図、示していない。)

この列石の南東端には、(第1図下段）に示した瀬戸鉄釉三耳壺・および、P.L_1に示す14～15世紀の青磁皿口縁破片が出土した。

既述の人頭大列石下には、溝状遺構があって、R_7にのび、さらにR_7の西壁面下に続いていた。残念ながら道路幅内の発掘のため追跡できなかったが、所見としては、後述する「豪族居館址？」とした住居址より、その構造が一段と豪邸と考えることができる。

2.〔豪族居館址？〕→（第2・9図，写$_3$（$\frac{1}{2}$）

●夏の発掘において、X_5トレンチ（2m×8m）を調査した際、Ⅲ層上面において柱穴群と南北にのびる溝状遺構を検出した。

そのため、春の調査において、南北10m、東西10mの大グリットとし、(X_5・R_{22})として調査をすすめた。また、R_{21}グリットも掘り進んでいたが、R_{21}グリットにおいて、南北にのびる溝状遺構が、R_{22}グリットにのびることが確認できた。そのため、(X_5＋R_{21}＋R_{22}）をⅢ層上面まで掘り下げ精査した状況が、写$_3$（$\frac{1}{2}$）①～④である。また第9図はその実測図である。

この居館址は、1棟ごとに浅く広い溝によって区画され、北に1棟・西に1棟があり、中央の1棟には、長径・短径とも約1m、深さ約80～90cmの大形の「火たき場」を持っていた。（写$_3$ $\frac{1}{2}$—④参照）

この「火たき場」とした遺構内からは生焼け粘土塊が出土した。中央に設けたベルトの観察では、一度に埋没したものらしく、セクションは、灰まじりのⅡ層のみ

で層序の区分はできなかった。なお、この「火たき場」は、その焼け具合から短期間の使用と観察した。

また、(X 5＋R 22) に南接する (R 21) Ⅲ層上面で検出した挾く深い溝状遺構は、(R 21)、(R 22) の西側を南北に14mとおり、さらに南・北にのびていた。

すなわち、一棟ごとに区画する広い溝は、その西側で南北にのびる挾いが深い溝に落込むように接続していた。(第9図参照)

これらのことから末完掘であるが、一応「豪族居館址」としたが、断定は控えたいと考えている。なお詳細については、(第9図) で理解されたい。

3.〔寺院址？〕→ (第2・4・7図、写 3 $\frac{2}{2}$ ―①～④)

●この遺構は、(X 3＋R 27) グリットにおいて、Ⅲ層上面で検出したものである。

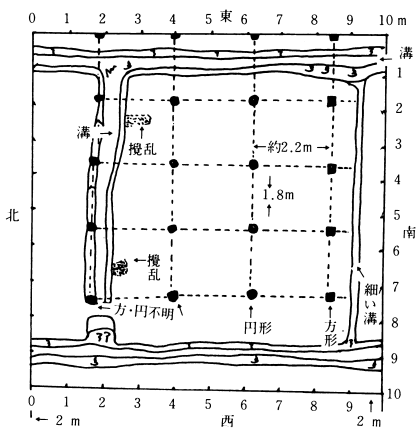
この遺構は、北側、東側に広く浅い溝状遺構を持ち、南側には、後掲した細い溝状遺構を東西に持つもので、さらに西側には、帯状列石群をⅡ層に南北に長く、(長さ約8m、幅1m～85cm) を計った。) 配列する状態で検出した遺構である。

(写 3 ($\frac{2}{2}$) ―②③)

●この西側壁面下の帯状列石群は既述のように、Ⅱ層下位検出であるので、これを除くと、その下、すなわち、Ⅲ層上面を掘り込んだ溝状遺構が、南北にのび、南・北の壁面下まで続いていた。

以上、述べた (R 27＋X 3 グリットの南北10m×東西12m) の東・西・南・北の溝状遺構に、四周を囲まれた区画内に、西方より見て外側が方形柱穴、内側が円形柱穴 (確認面での観察では。) が、Ⅱ層の黒色土を詰めて確認された。その模式図を示すと下図のようになる。

(X 5＋X 5 拡＋R 27) 検出遺構模式図



左図のような柱穴配置である。このうち、南側柱列は、方形、その左側(6.4m) 2列のうち、6m線の柱穴は円形、4m線・2m線の柱穴は、方形・円形→どちらにも決定しかねる状態であった。なお南側壁面下の細い東西にのびる溝状遺構は、東側の溝によって切られていた。

また、第7図を見るとわかるとおり、柱穴状pit が、他にも検出されているので、やはり、「豪族居館址？」としたもの

と同様、新旧２期に分けて考えることができる。(柱穴列→新)

すなわち、模式図の柱穴の配置から考えても、柱穴はさらに東方にのびており、北～東側の溝は、新しく、南側の細い溝（幅約15～20cm）は、この柱穴列に伴う可能性がある。

末完掘ではあるが、一応柱穴の配置等から「寺院址」と仮定した。

4.〔配石遺構〕（第２・10図）

●配石遺構は、既述したとおり、Y_1グリット、Y_8トレンチで検出した、Y_8トレンチではⅡ層上面において、半円形に配列された遺構であったが、秋の調査で吹雪のため追求を断念したので詳細は不明である。

●Y_1グリットで検出した配石遺構は、(第10図に示したとおりであるが、東壁下に列石が南北に並んでおり、この列石は、既述したところの、R_{27}西壁下Ⅱ層（写$_6$ －②③）に示す「帯状列石群」と、同様の性格を持つ可能性を否定できないと考えている。

すなわち、(第２図）でわかるとおり、R_{27}とY_1 グリットは近接しており、両者ともⅡ層で検出しているからである。

また、Y_8グリットの東壁面下の列石を除く他の配石、(第10図）は、別個の性格を有するものかも知れないが、両者ともその性格は不明である。

5.〔火葬台址〕→（第２・８図、写$_2$（$\frac{2}{2}$）－①～④）

●この「火葬台址」としたものは、(R_{28}）グリットのⅡ層上面で検出した。

このものの形態は、(第８図・写$_2$（$\frac{2}{2}$－①～④）でわかるとおり、南北になっており、おそらく頭位は北向きと考えられる。

その形状は、靴の敷革状で、北・南端は高く中央部が低くなっており、その全面に粘土を貼付しているものである。この貼付された粘土は、焼けており、その厚さは３～５cmを計った。

この粘土の焼け具合から見て、使用された回数は、ごく少ないように観察した。また、この「火葬台址」とした遺構の周辺を掘り下げた際、Ⅱ層とした黒土は固く、移植ベラでは剝ぎ取れない程の固さであった。このことから、Ⅱ層上面を堅くし、その上に粘土を貼付したものと認められた。

この「火葬台址」上からは、人骨片が５～６片出土した、

なお、この「火葬台址」に隣接するX_1グリット（第２図）からは、３つのpjtに焼けた人骨が入っていた、（この火葬台で火葬されたものとは断定できない。)

●「火葬台址」とした理由については、X_1グリットの状況、隣接する「寺院址？」そして、遺構の形態等からであるが、「寺院址」および人骨出土のX_1グリットの確認面とでは、火葬台址は浅くレベル差が大きいので、同一時期とは考えられない。

〔Ⅲ〕 出土遺物(P.L$_{1}$～P.L$_{28}$第1図下段・写$_{2}$

●出土した遺物は、陶磁器・木製品・鉄滓・鉄製品・土錘、骨類・古銭である。以下簡単に述べることにする。

1)、陶磁器→出土した陶磁器を産地別に分類し、その出土破片数を計算すると次のとおりである。

---

①青磁→$\left\{\begin{matrix}137\\10\end{matrix}\right\}$	②白磁→$\begin{matrix}29\\6\end{matrix}$	③瀬戸→$\left\{\begin{matrix}66\\11\end{matrix}\right\}$
④信楽→$\left\{\begin{matrix}17\\9\end{matrix}\right\}$	⑤備前→$\left\{\begin{matrix}10\\3\end{matrix}\right\}$	⑥越前→$\left\{\begin{matrix}15\\2\end{matrix}\right\}$
⑦珠洲→$\left\{\begin{matrix}28\\6\end{matrix}\right\}$	⑧瓦器→$\left\{\begin{matrix}12\\5\end{matrix}\right\}$	⑨不詳→$\left\{\begin{matrix}81\\17\end{matrix}\right\}$
⑩唐津→$\left\{\begin{matrix}86\\15\end{matrix}\right\}$	⑪伊万里→$\left\{\begin{matrix}\alpha\\13\end{matrix}\right\}$	⑫近年→$\left\{66+\alpha\right\}$

以上の出土である。(☆下段掲示数、上段は掲示しない数、α は量が多い。)

上に示したように、備前・越前の出土数が少なく、また、青磁に比して白磁が少ない。

●年代的には、14世記～15世紀のものが多く、特に16世紀のものが少ないことが目立っている。そして17世紀の肥前陶磁器が再び多くなっている点を指摘しておきたいと考える。

2)、木製品→木製品は、漆器碗3片（P・L$_{97}$)、井戸用木片1片、焼けた柱の残欠2片の出土である。このうち｛(井戸用木片→X$_{11}$－Ⅲ層出土・焼けた柱の残欠→X$_{11}$－Ⅲ層出土)、は掲示してない｝

3)、鉄滓・鉄製品→鉄滓は、13こ、鉄製品は、122この出土であるが一部を掲示した。

4)、貝類・土錘→貝類12こ、土錘33この出土である。

5)、人骨→個体数は不明、これらの骨類は、日本大学金子浩昌氏に鑑定していただいた。

出土グリットは、X$_{1}$→Ⅰ層3袋、Ⅱ層1袋、Ⅲ層1袋、X$_{2}$トレンチ→Ⅱ層2袋、

X_3グリットⅠ層1袋、X_4グリットⅠ層下(ⅠC) 1袋、Y_1グリットⅠ層下(ⅠC) 1袋となっている。(20×40cmポリ袋)

すなわち、「火葬台址」「寺院址？」に近接する地区に集中している傾向がある。

いずれも火葬骨であって、しかも、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層の各層から出土している。(掲示せず)

6)、古銭→古銭は、全部で6枚出土した。そのうち、「洪武通宝」→2枚、「政(咏)和通宝」→1枚、不明→3枚である。(掲示せず)

以上が、出土遺物の全部であるが、陶磁器については、P・L_1～P・L_{28}に、年代その他を示したので詳細は省略する。

〔Ⅳ〕 若干の問題点(考察にかえて)

1)、琴湖岳遺跡は、15年程以前に、十三小学校新築のため、敷地を事前調査する調査団に参加した。この調査においては、遺物の出土や遺構（鍛冶遺構）の検出はあったが、住居址等の集落址は検出されなかった。

本発掘調査においては、検出された諸遺構からは、明らかに集落址と考えられる。すなわち、(現十三小学校）を境界にして、その北側と南側では、遺跡の性格が異なる可能性が、現時点において考えられる。すなわち、琴湖岳遺跡を「北遺跡」と「南遺跡」にわけて考える必要が将来予想されるところである。

2)、今回の発掘において、出土遺物の分類から、14世紀～15世紀の陶磁器、および17世紀～17世紀以降とされる遺物の出土は既述したとおり多く出土している。

しかし、16世紀前半のものの出土は皆無と云ってよい状況である。(わずかに16世紀末のものは出土した。)

この16世紀前半（$\frac{1}{4}$～$\frac{3}{4}$）の遺物の出土が無い点に、注目する必要があることを、特に指摘しておきたいと考える。

3)、つぎに遺構の年代について考察してみると、既述したように、生活面と考えられることは既述したとおりであるが、層序でⅡ層とした上面、および漸移層としたⅢ層上面、さらに遺構の状態から、Ⅲ層上面は新・旧の２期に分けられる。

●このことについては、全発掘区の総合的分析からも断定できるように考えている。

●出土陶磁器の年代からも、「14世紀～15世紀」「17世紀～17世紀以降」と２期に分類される。

以上のことから、Ⅱ層上面を「近世」、Ⅲ層上面の生活面を「中世」と考え、その上でⅢ層上面の生活面を「新・旧」に分けることが可能であろう。

3)、出土した陶磁器類は、14世紀～15世紀のものは、中国製（龍泉窯）や和製が多いが、前者の「白磁」が少ない。(表採品の中には景徳鎮も認められる。) なお、「白磁」の出土が少ないことは、「浪岡城跡」においても同様であると云う。(工藤清泰氏の教示による。)

●つぎに、16世紀（$\frac{1}{4}$～$\frac{3}{4}$）を空白にして、17世紀～17世紀以降のものは、「肥前陶磁器」→唐津・伊万里が多い。

●以上のように出土陶磁器類の分類からも、Ⅱ層・Ⅲ層の生活面を、それぞれ「近世」→初頭、「中世」→新・旧と考えることが妥当と考えた。

●なお、出土陶磁器類の一部は、約100m離れたグリットのものと接着するものがあり、動いていることが推測される。また、陶磁器片はⅠ～Ⅳ層から出土があるため、層位的に年代決定は不可能であった。　（新谷記）

☆参考文献（順不同）

① 1976　世界陶磁全集12　宋　小学館

② 1981～1984　貿易陶磁研究No.1・2・4　貿易陶磁研究会

③ 1982～1984　浪岡城跡Ⅶ－Ⅸ　浪岡町教育委員会

④ 1983　国内出土の肥前陶器→古唐津・伊万里の流通をさぐる　佐賀県立九州陶磁文化館

⑤ 1984　世界陶磁全集3　日本　小学館

⑥ 1984　江戸のやきもの（特別展図録）　五島美術館

⑦ 1984　宮城県仙台市　後河原遺跡　埋蔵文化財研究所後河原遺跡調査団

⑧ 1985　遺跡　梁川城本丸・庭園　福島県梁川町教育委員会

⑨ 1985　砂屋戸　荒川館調査概要　いわき市教育文化事業団

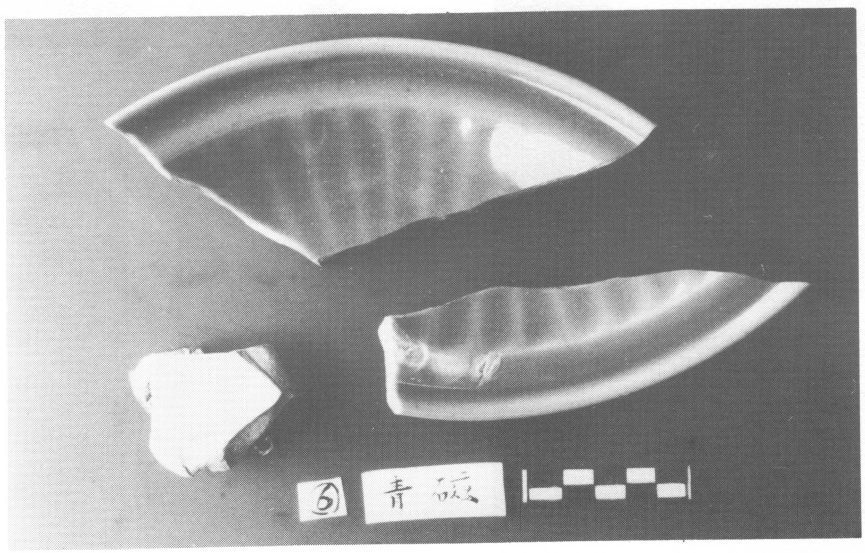
〔青磁〕

⊙15世紀前半 {14C後～ / 15C前半（$\frac{2}{4}$）}

(Ⅲ)

X_{14}Ⅱ下	
X_{11}Ⅲ	X_{14}Ⅱ下

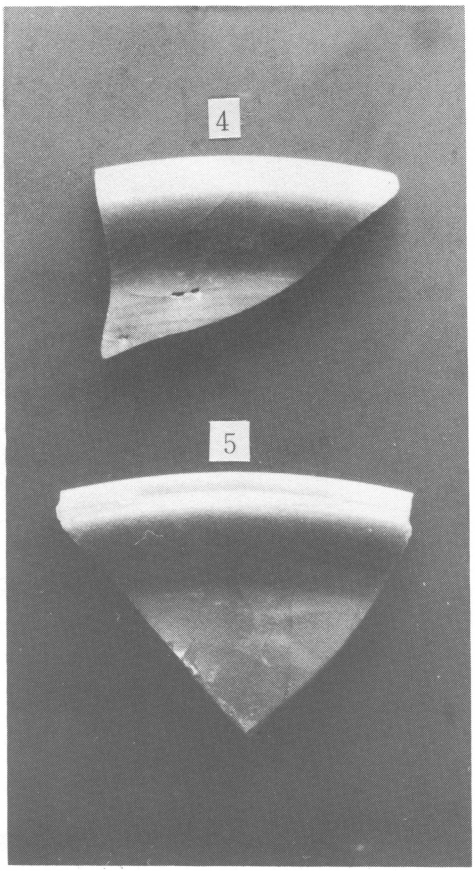
↓

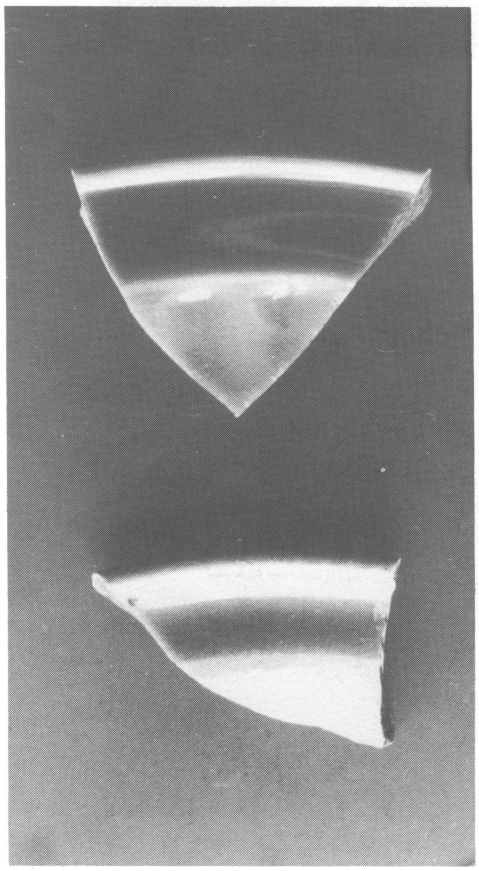


P・L 2

〔青磁〕

⊙15世紀前半 {14C後～ / 15C前半(2/4)}





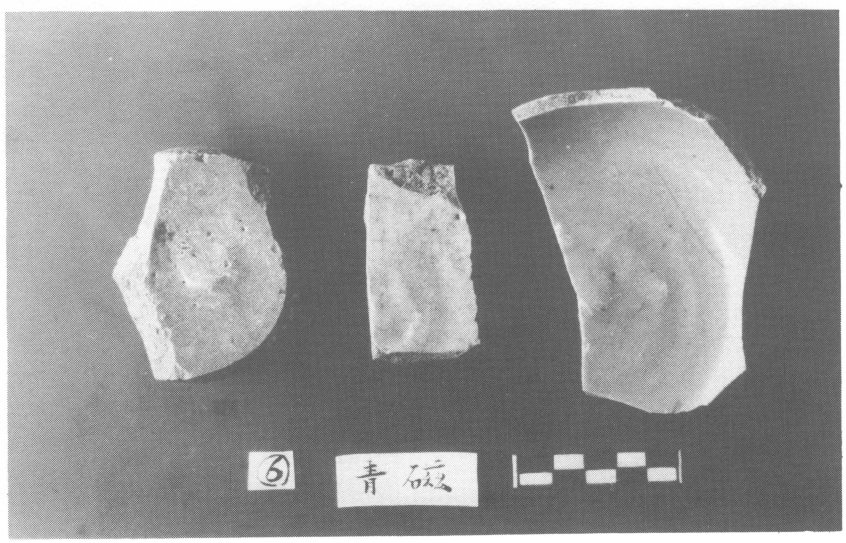
〔青磁〕

⊙15世紀前半 {14C 後～ / 15C 前半($\frac{2}{4}$)}

6　　7（碗）　　8

R_{28} I c	R_{1} I c	R_{28} I c

↓ {(☆) 6 ～ 8 →高台内無釉}



P・L 4

〔青磁〕

9　　10

R 21Ⅳ | Y 8 Ⅱ

↓ {(☆) 9 ・10→高台無釉}

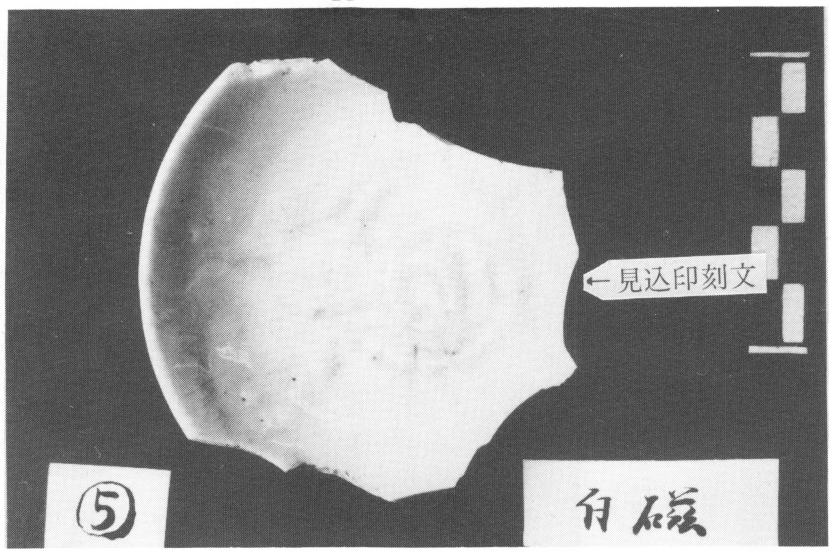
見込・印花文

↓

〔白磁〕

⊙15世紀前半 {14C後～ / 15C前半(2/4)}

11 (丸皿)

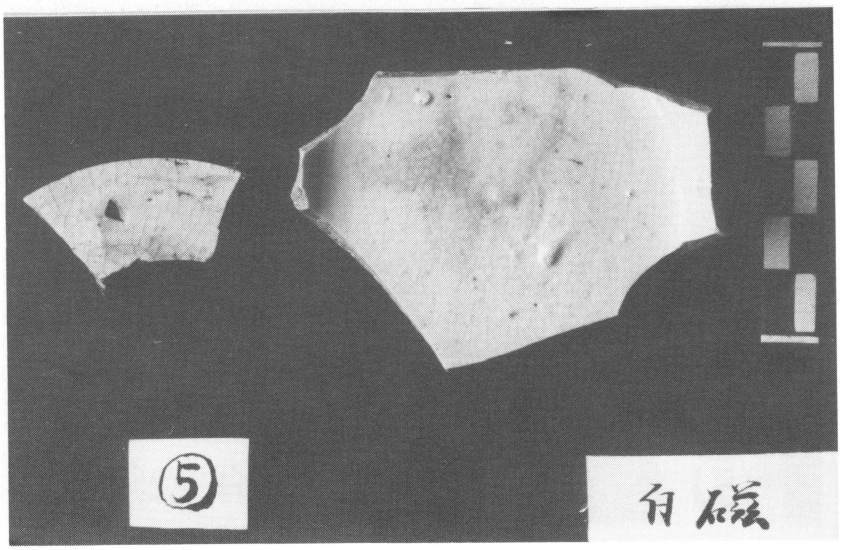


R 7 AⅡ → {(☆)硬質 / (☆)高台内無釉}

〔白磁〕

⊙15世紀前半 {14C後～ 15C前半(2/4)}

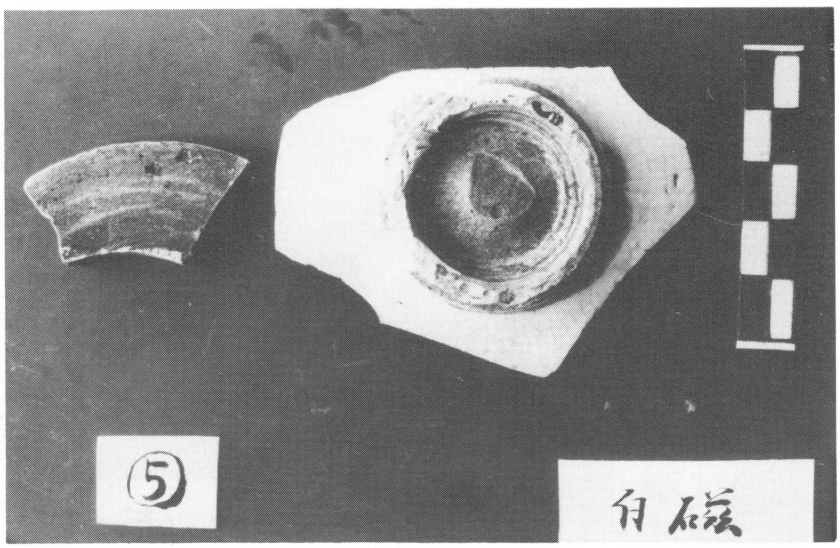
12　(坏)　13



R 16 II　Y 14 II

↓

{(※) 12→丸形小坏
13→馬上坏}

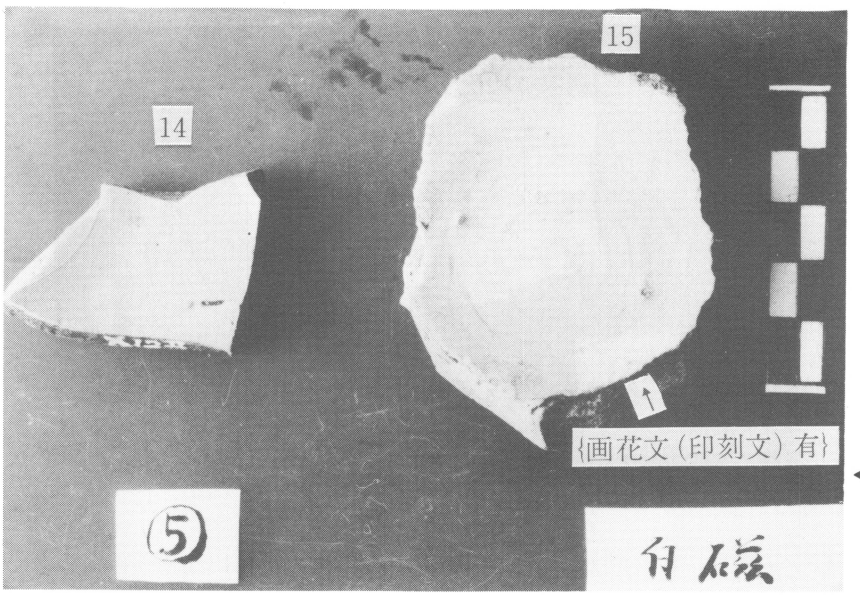


(※) 軟質

〔白磁〕

⊙14～15世紀

14　（碗）　15

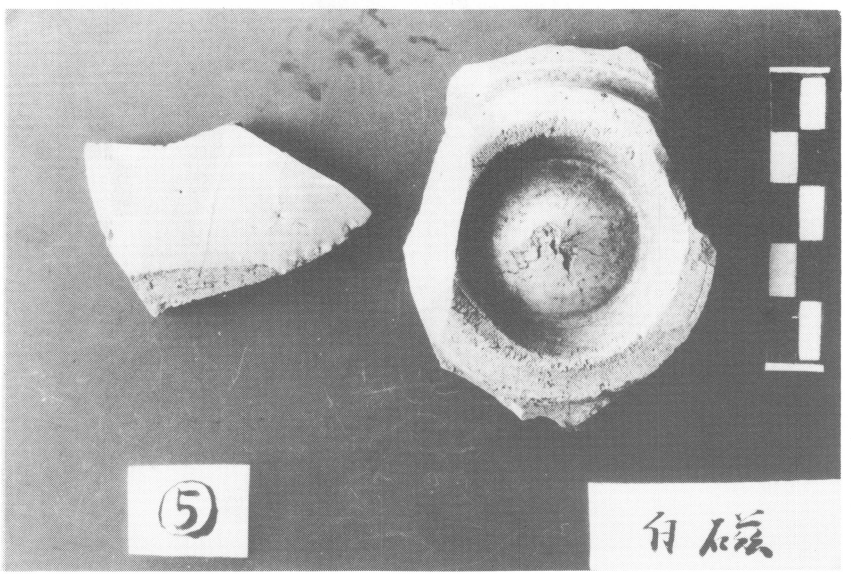


画花文
←（印刻文）

{画花文（印刻文）有}

X_{12}Ⅱ　|　R_{12}Ⅰc

↓（☆）軟質

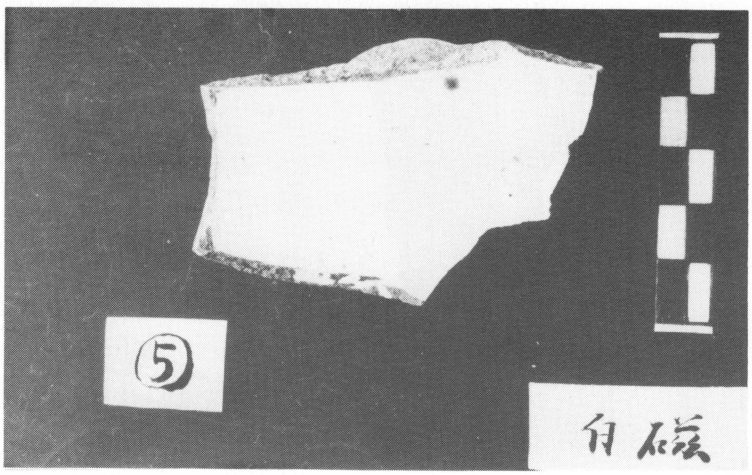


P・L 8

〔白磁〕

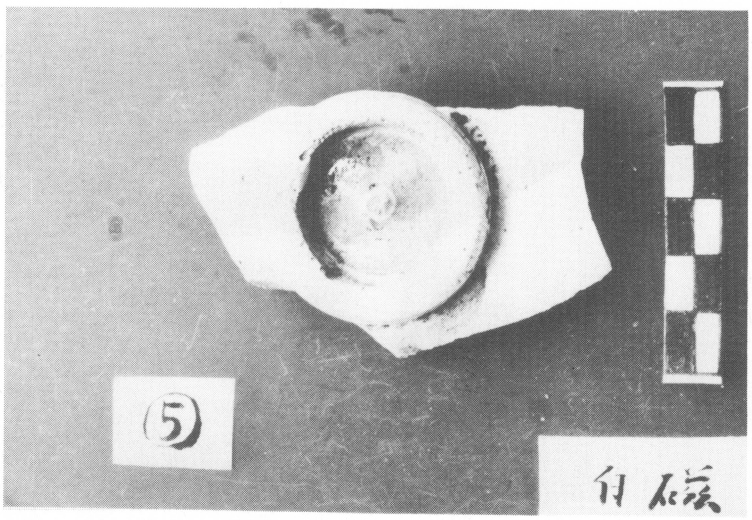
⊙15世紀前半（$\frac{2}{4}$）

16



Y 1 Ⅲ

↓｛（☆）高台内無釉｝



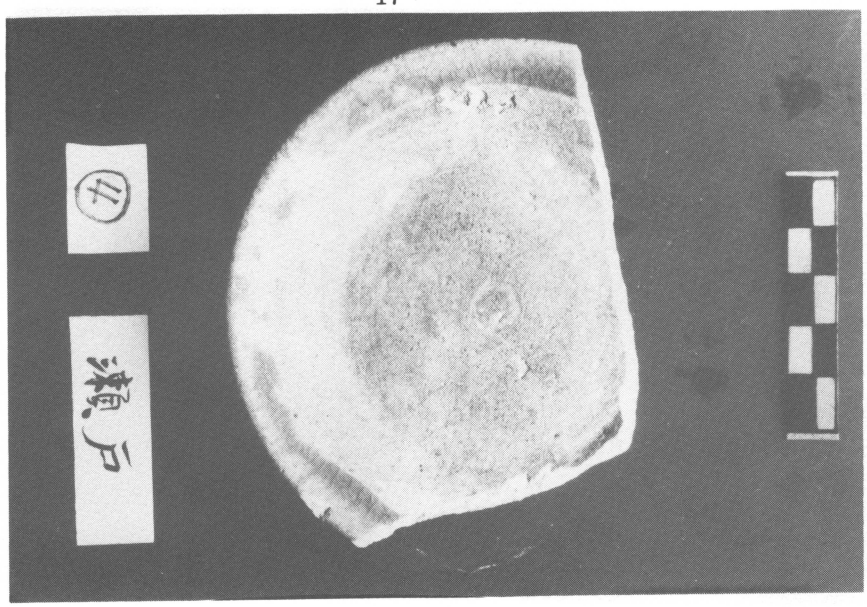
（☆）軟質

〔瀬戸〕

⊙15世紀

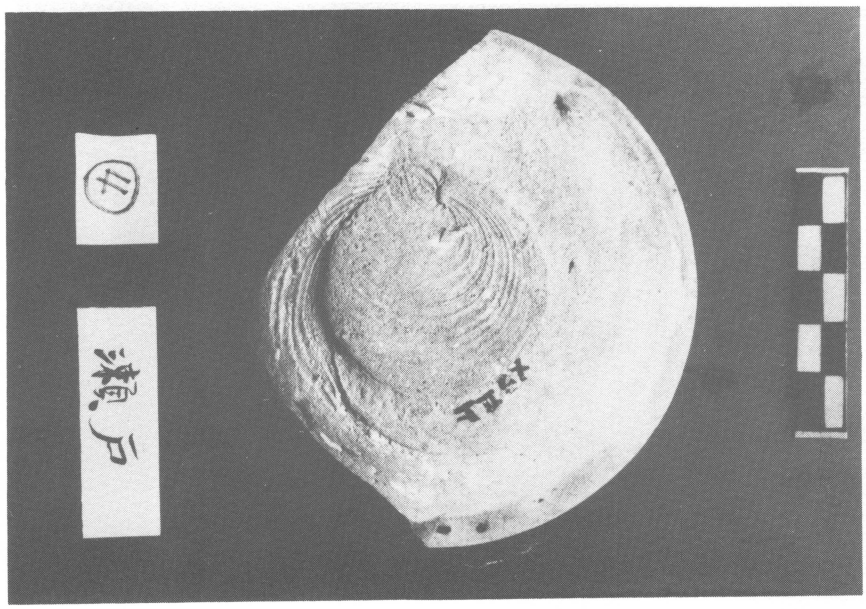
（緑釉皿）

17



X 5 Ⅱ上

↓｛(☆)糸切り痕有｝



｛(☆)瀬戸灰釉｝

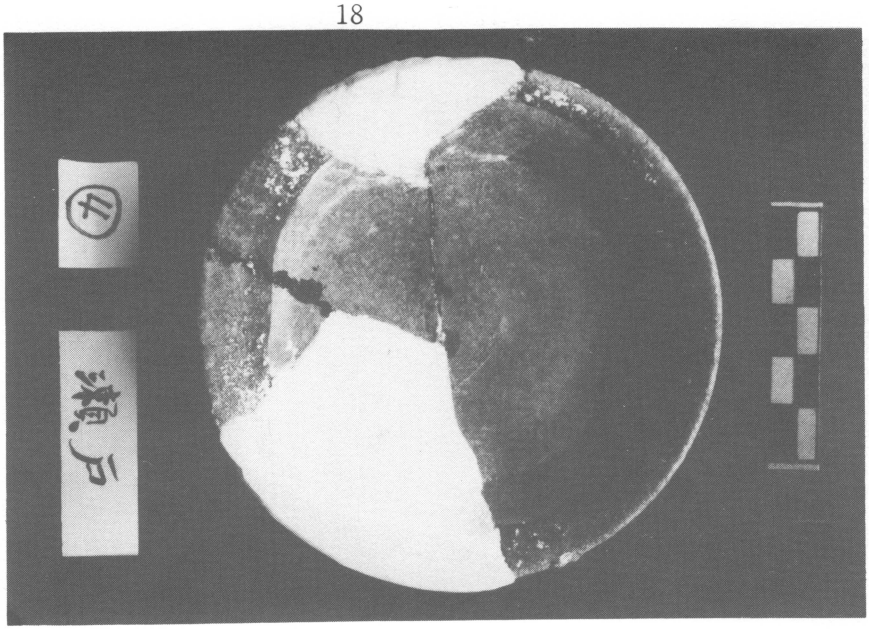
P・L10

〔瀬戸〕

⊙15世紀

（緑釉皿）

18



Y₁Ⅱ下

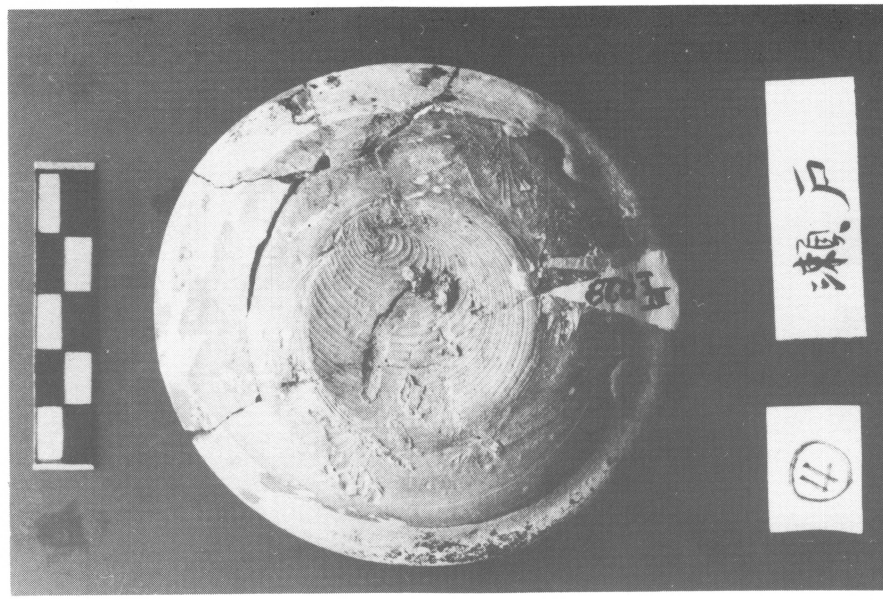
↓｛(☆)糸切り痕有｝

｛(☆)瀬戸灰釉｝

〔瀬戸〕

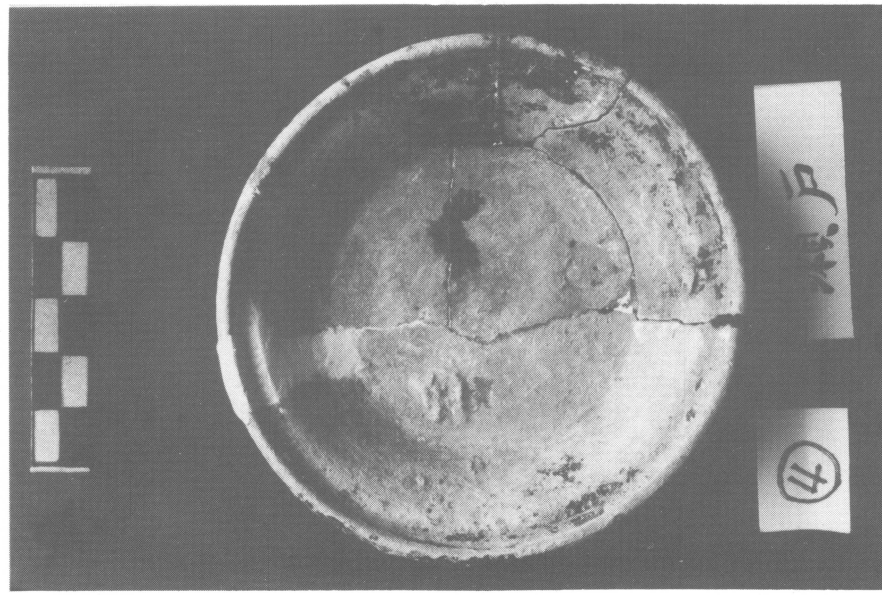
⊙15世紀

19　（緑釉皿）



R_{28}Ⅱ上

↓



{(☆)瀬戸灰釉}

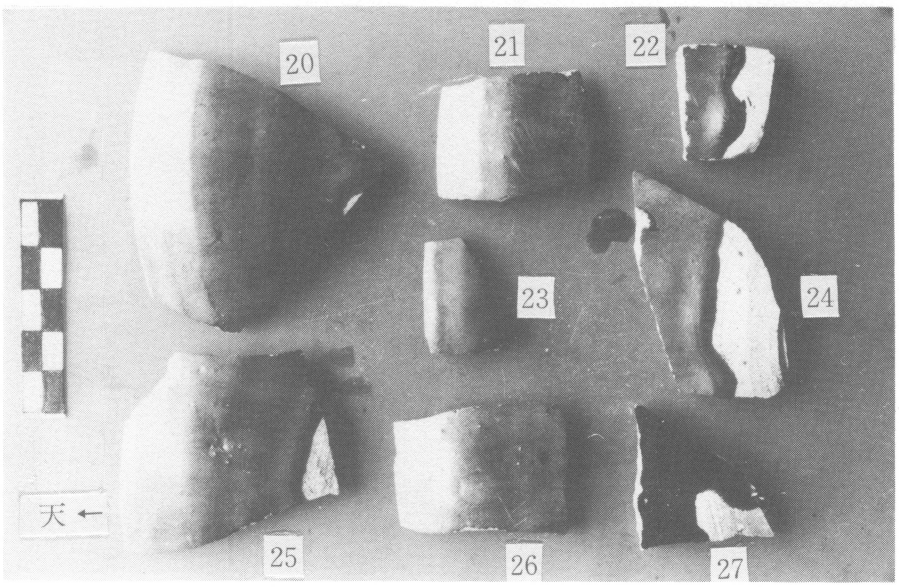
P・L12

〔瀬戸〕

◉15世紀

（天目碗）

20　21　22

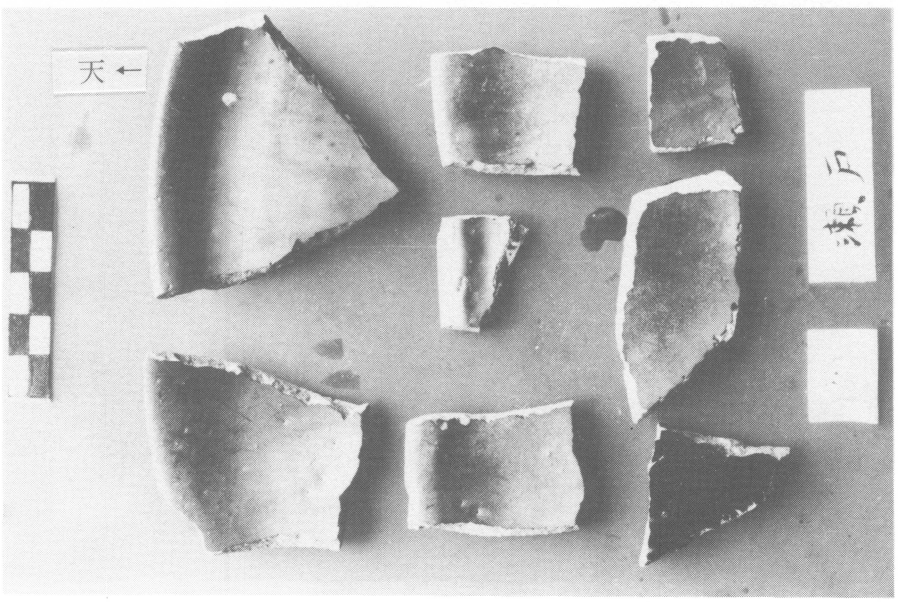


天←

X 1 Ⅱ	X 14 Ⅲ	X 14 Ⅱ
X 14 Ⅲ	R 21 Ⅳ	X 10 Ⅲ
/	X 7 Ⅲ	X 5 Ⅱ

↓

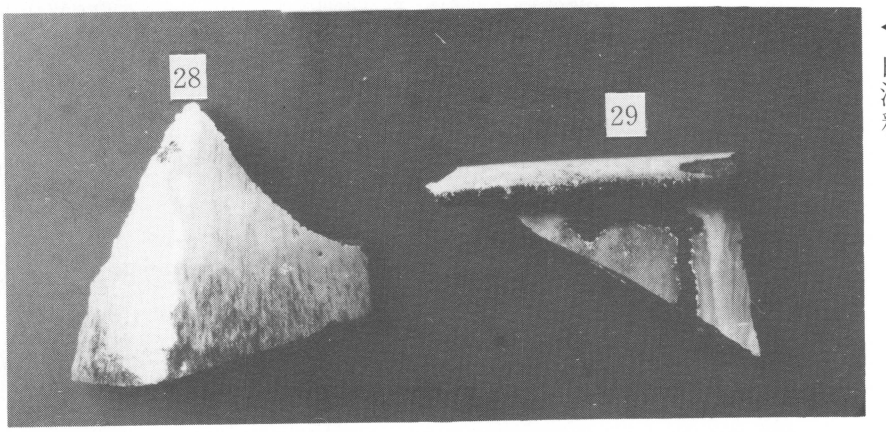
天←



{(☆)瀬戸天目碗}

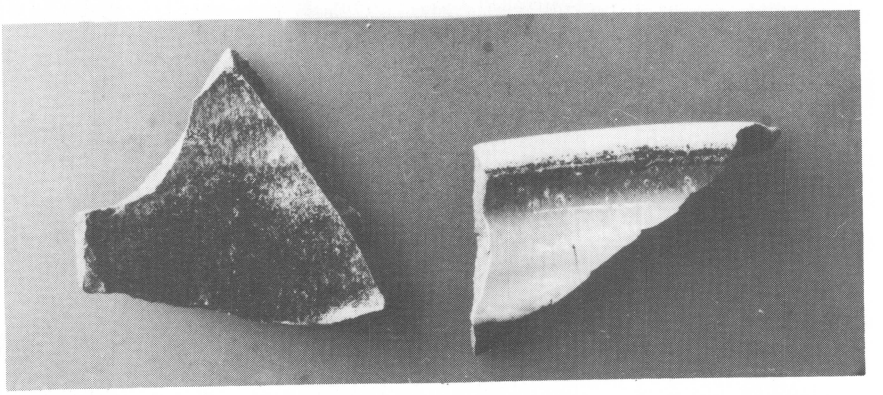
肥前陶器
〔唐津〕

⊙16世紀末～17世紀
（盤・鉢～甕）



← 白濁釉

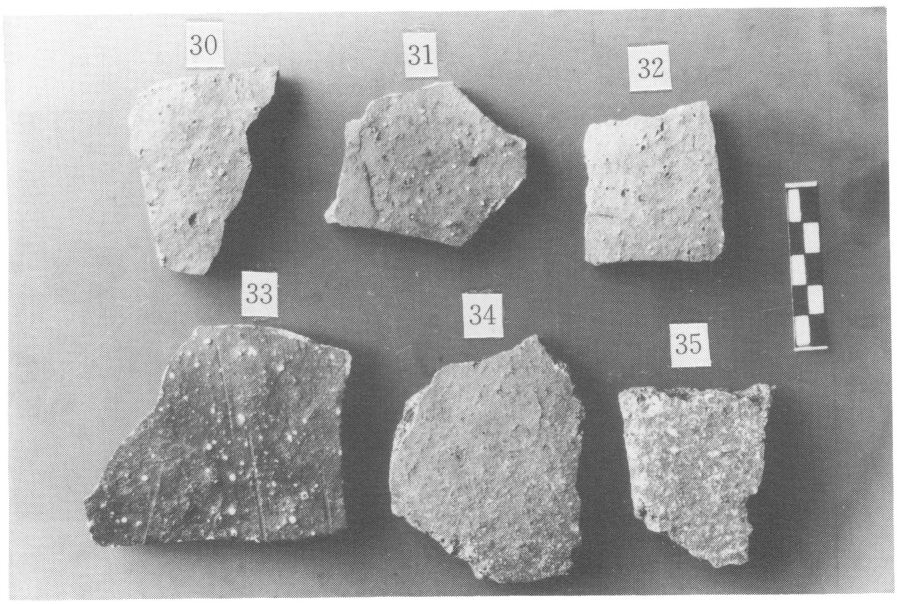
R₉Ⅰb | R₉Ⅰb
↓ {(☆)白濁釉}



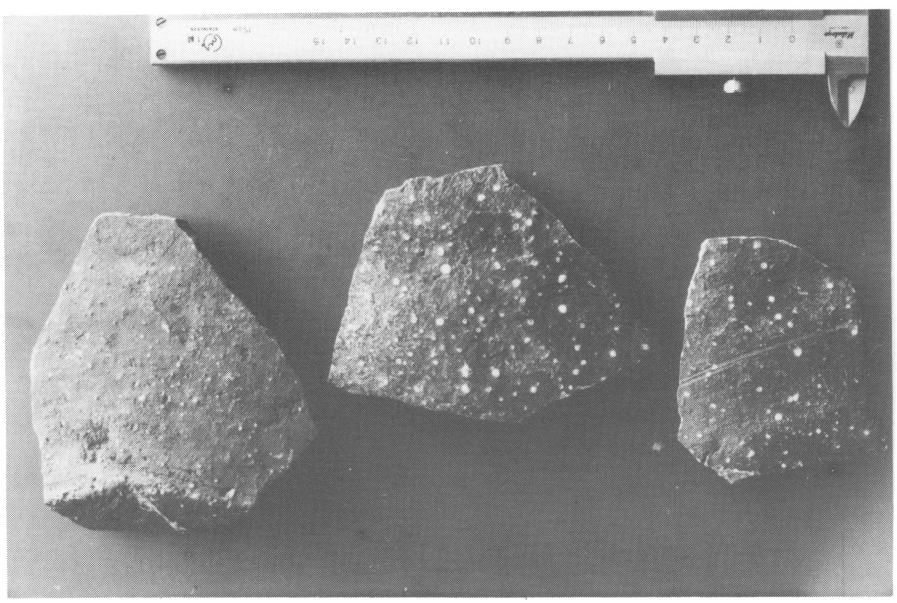
〔信楽〕(しがらき)

⊙15世紀

(壺)



R_{27}Ⅲ	X_{16}Ⅱ	R_{21}Ⅱ
R_{22}Ⅱ	R_{1}Ⅰ	R_{1}Ⅰ

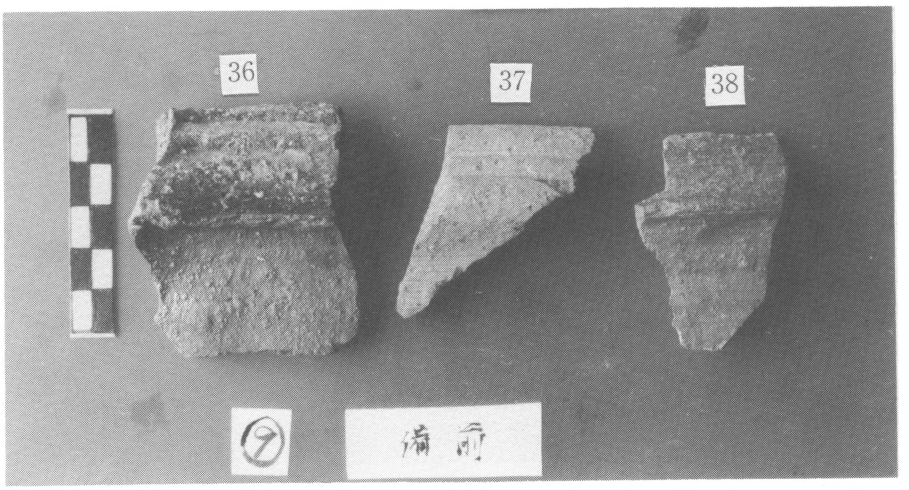


R_{22}Ⅲ	R_{22}Ⅲ	R_{2}Ⅱ

〔備前〕

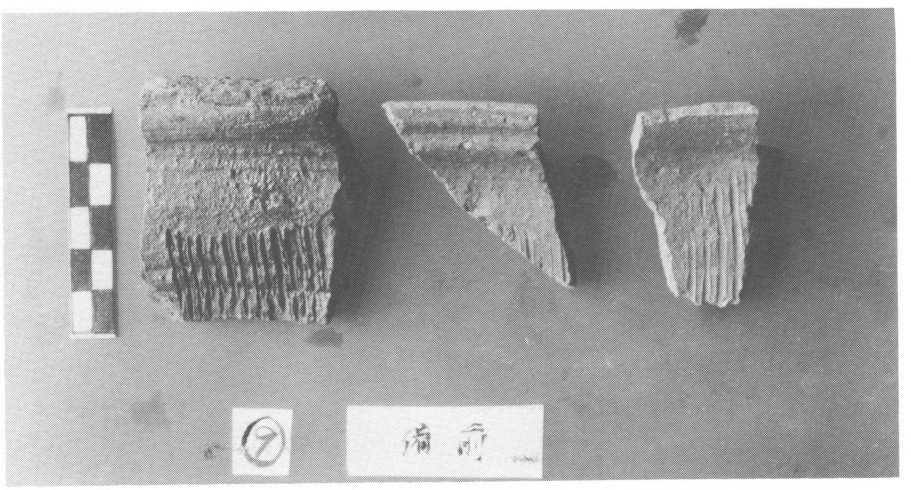
⊙15世紀

（擂鉢）



R_{22} I	R_{13} I	R_{22} II

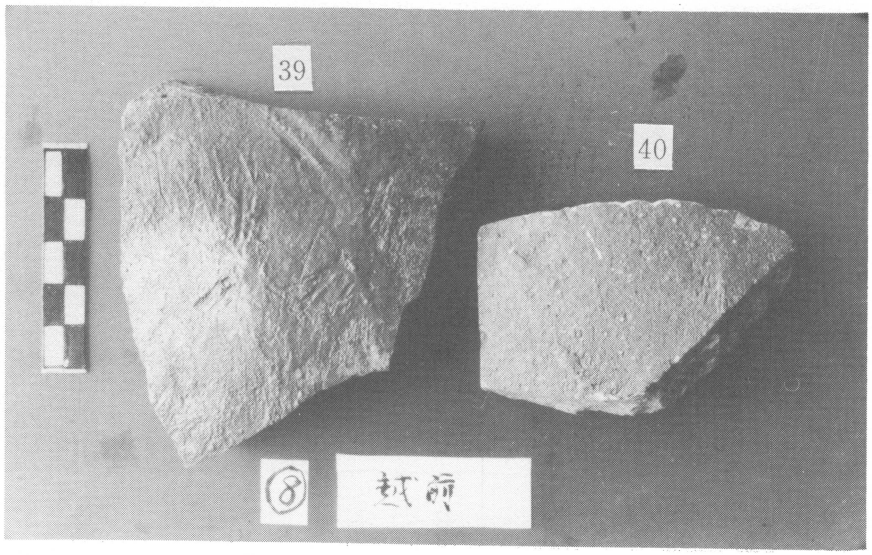
↓ {(☆) 口縁部破片}



〔越前〕

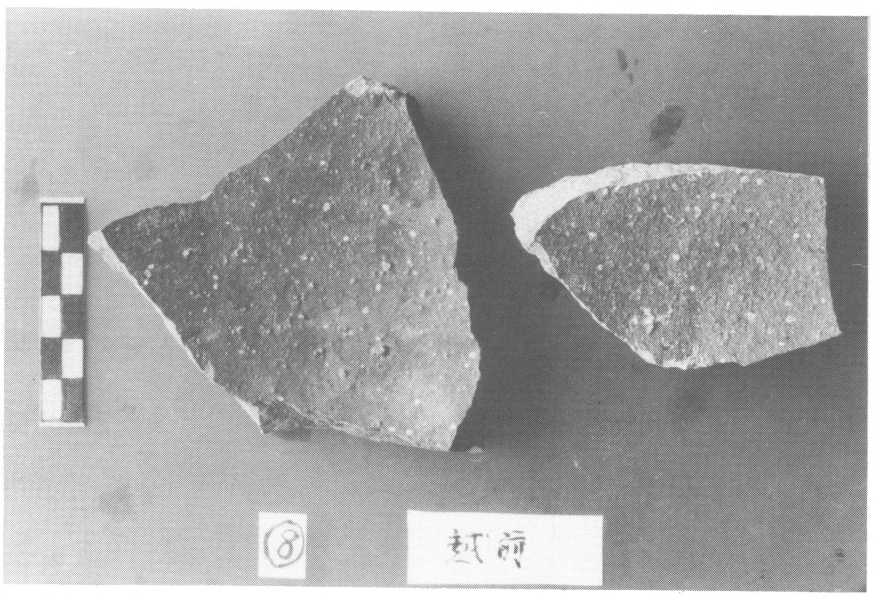
⊙15世紀

(甕)



R_{28} I c | R_{22} II

↓



〔珠州〕

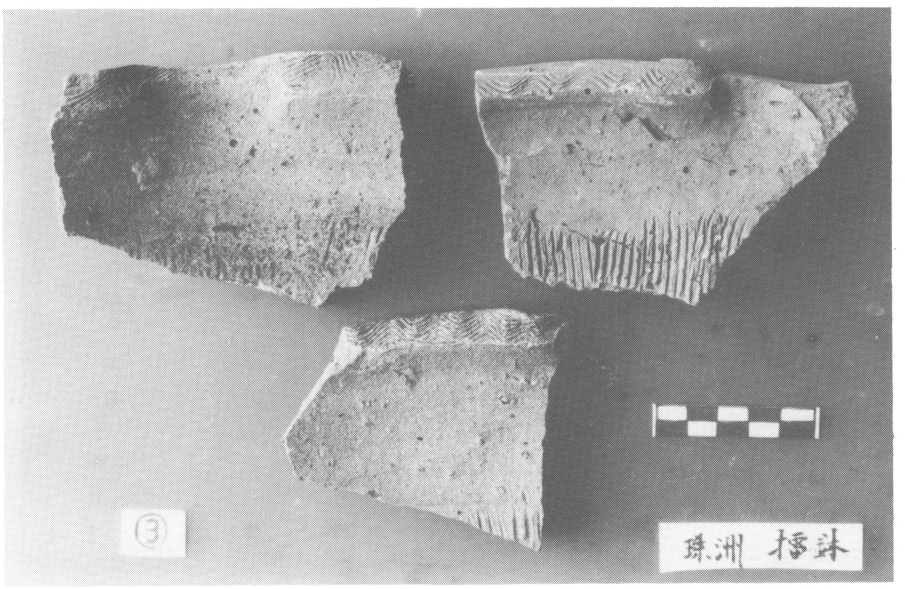
⊙15世紀前半（$\frac{1}{4}$～$\frac{2}{4}$）

（擂鉢）

R 7 II | R 1 I

R 7 I C

↓



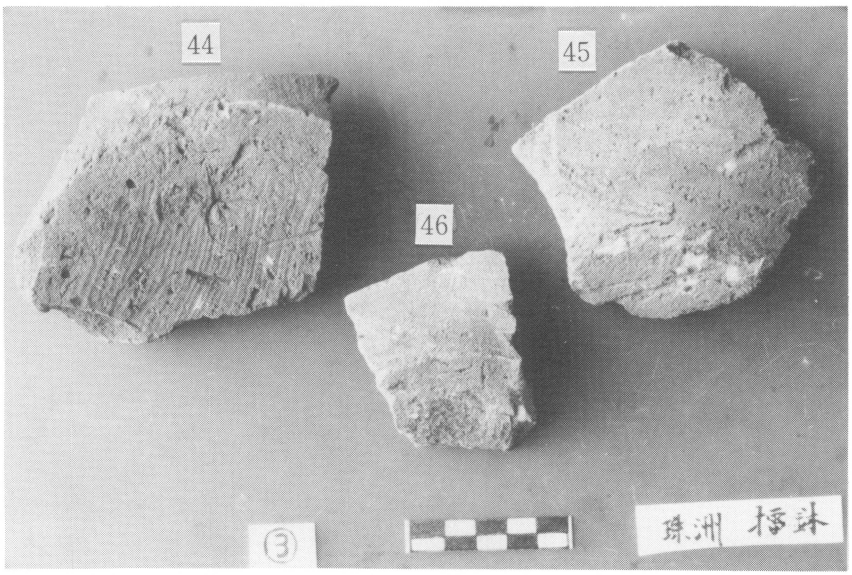
{(☆)片口付擂鉢}

P・L18

〔珠洲〕

⊙15世紀前半（$\frac{1}{4}$～$\frac{2}{4}$）

（擂鉢）



R_{12}Ⅰc | R_{28}Ⅰc

R_{18}Ⅱ上

↓

⊙14～15世紀
（火鉢）

←雷文・五弁花文

←唐花文
（唐菱文）

R 17 I b
R 4 I b

↓

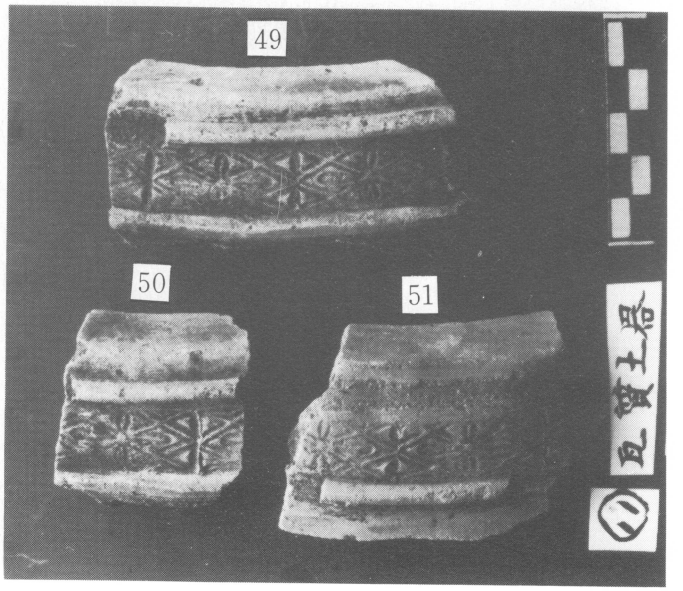
P・L20

〔瓦質土器〕

⊙14～15世紀

（火鉢）

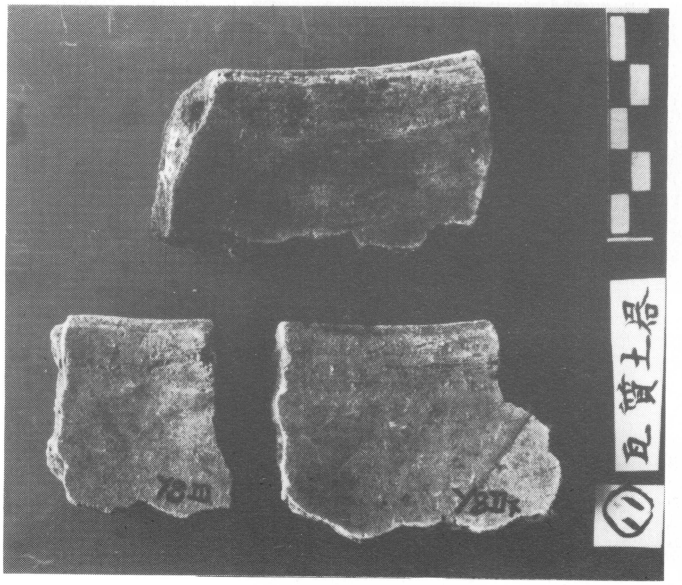
唐花文
（唐菱文）



Y 8 Ⅲ

Y 8 Ⅲ	Y 8 Ⅱ 下

↓

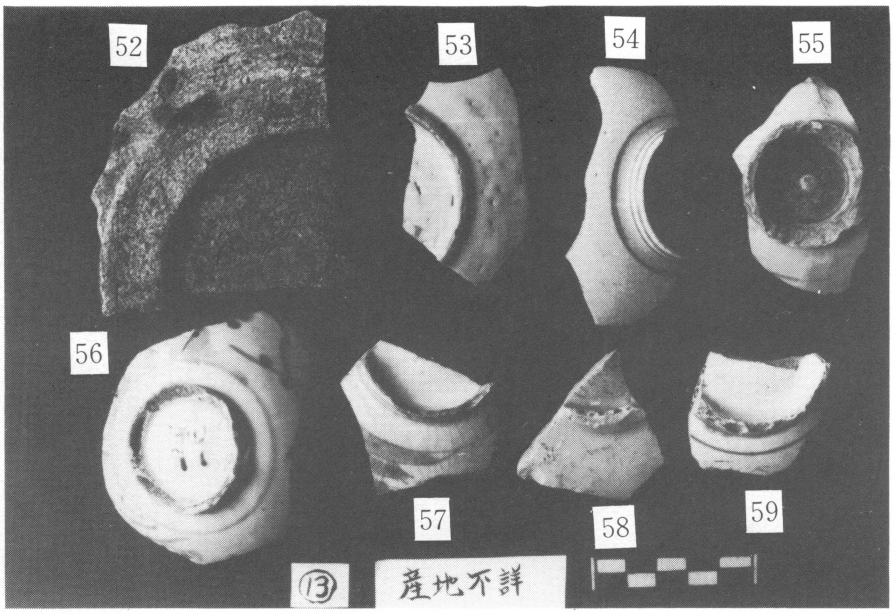


{(☆) 口縁唐菱文スタンプ、底部三足となる。}

〔産地不詳〕

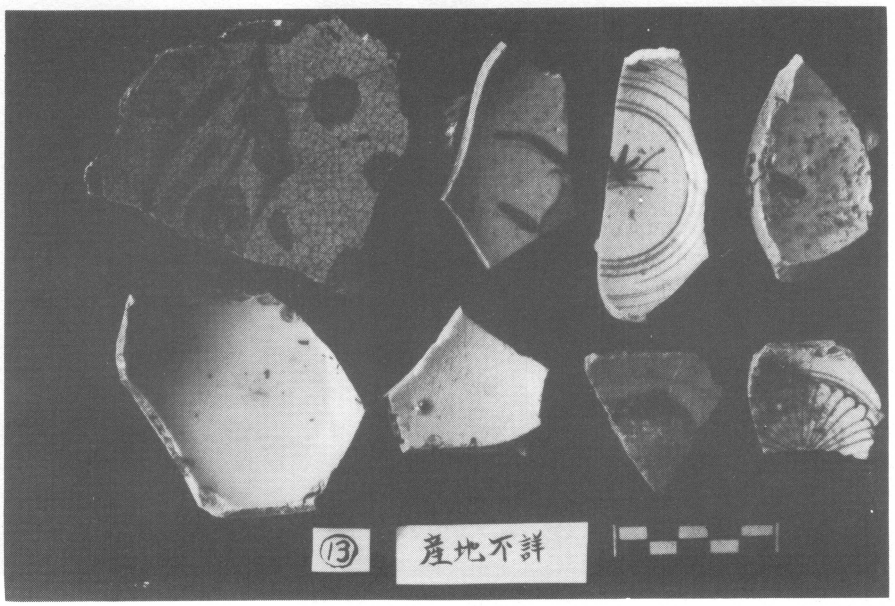
⊙15世紀代？

（皿・碗）



R 3 Ⅰ c	R 2 Ⅰ b	R 22 Ⅱ	R 26 Ⅱ
X 3 Ⅰ C	R 22 Ⅲ	Y 1 Ⅰ b	R 29 Ⅱ

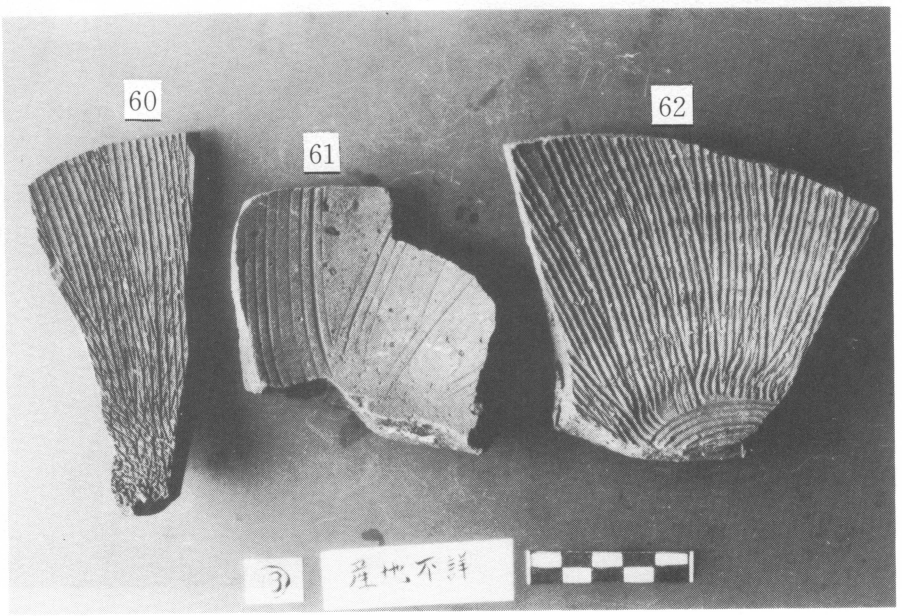
↓



〔産地不詳〕

⊙15世紀代？

(擂鉢)



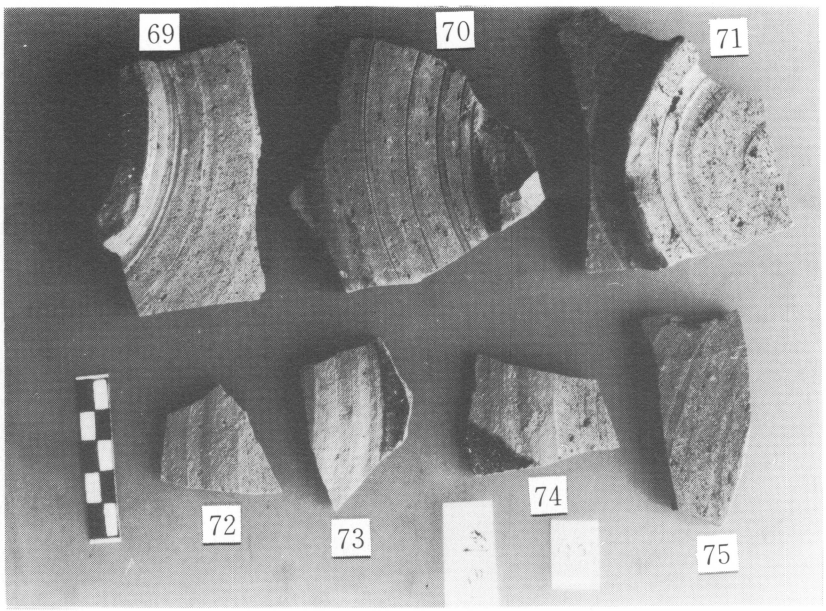
R_{28} Ⅰb	Y_2 Ⅱ	Y_3 Ⅱ

{(☆) 越前・信楽・備前？}

R_{28} Ⅰb	X_3 Ⅰc	X_2 Ⅱ
R_{29} Ⅰa	R_{29} Ⅰb	
X_2 Ⅱ		

肥前陶器
〔唐津〕

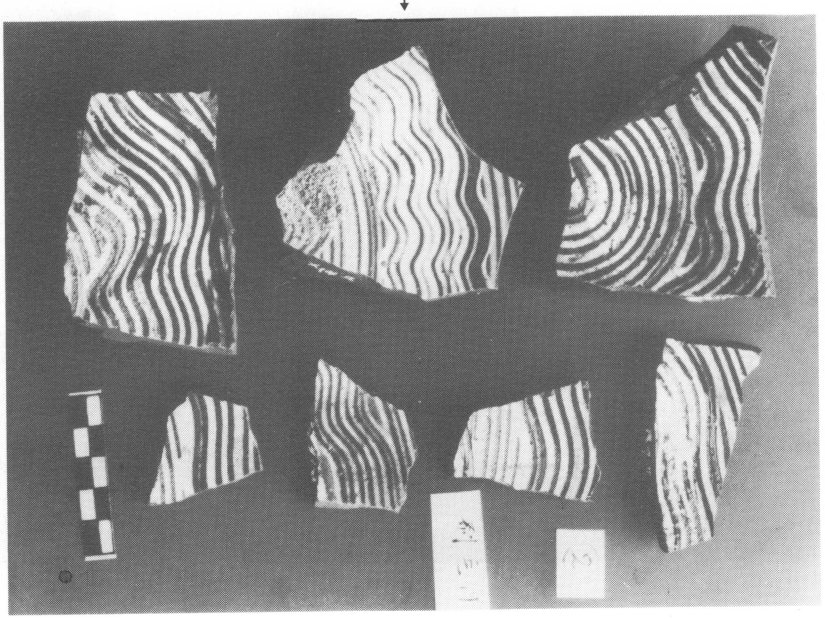
⊙16世紀末～17世紀
（皿）



X_{12} II	X_{14} II	X_{12} II

X_{14} II	R_{16} I b	R_{9} II	R_{9} II

↓

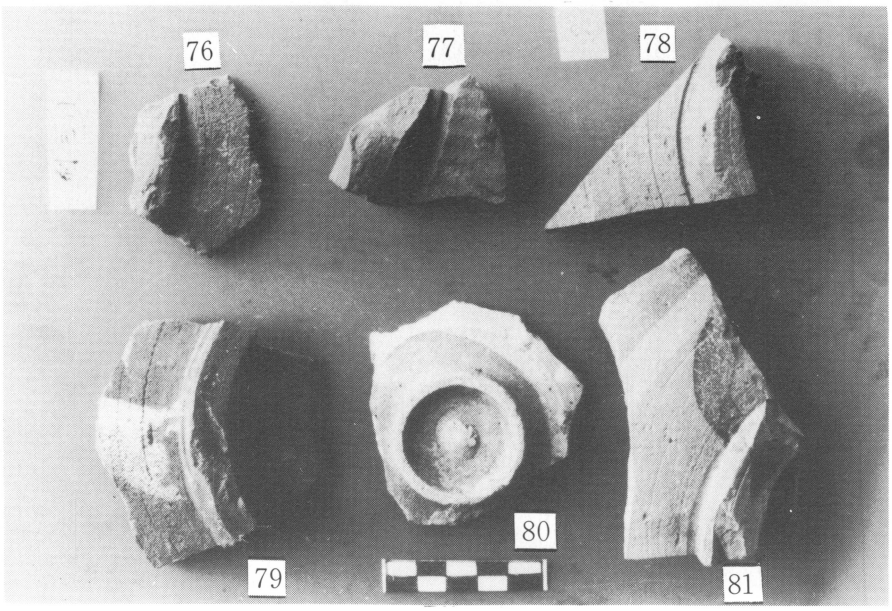


｛（☆）69～75→刷毛目｝

P・L24

肥前陶器
〔唐津〕

⊙16世紀後半（慶長以降）～17世紀
（皿）

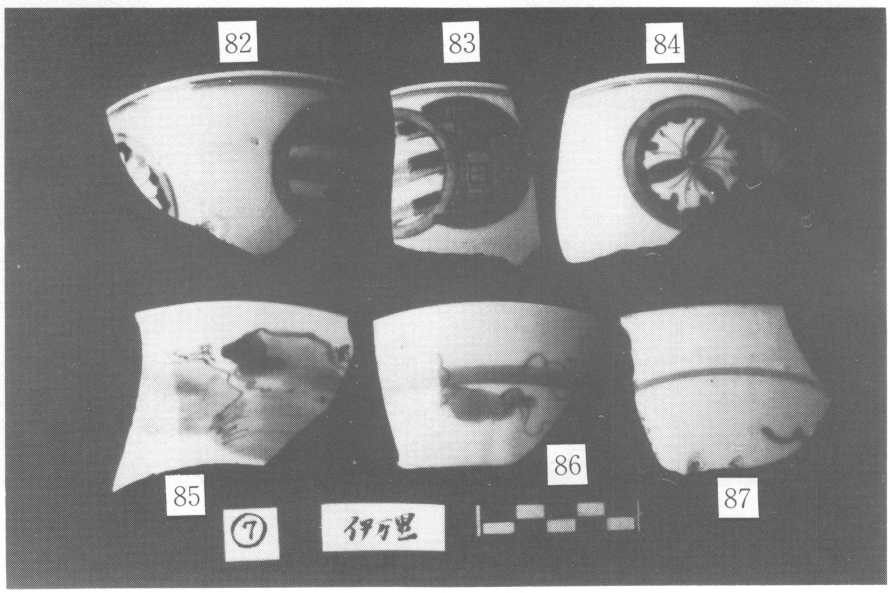


↓

｛（☆）76～81→砂目積（新）｝

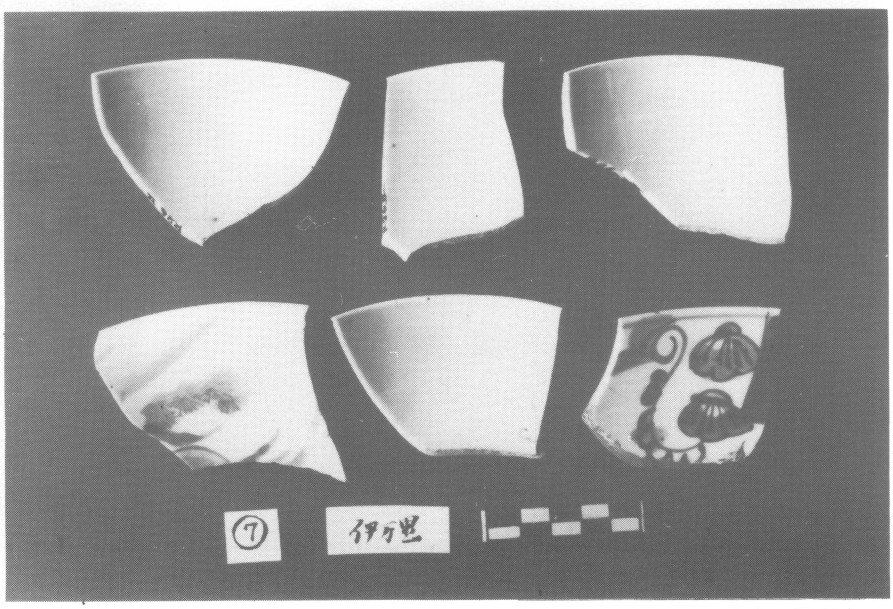
肥前磁器
〔伊万里染付〕

⊙17世紀以降
（碗）



R 26 Ⅱ	R 26 Ⅱ	R 26 Ⅱ
X 4 Ⅱ	R 19 Ⅱ	R 22 Ⅰ

↓

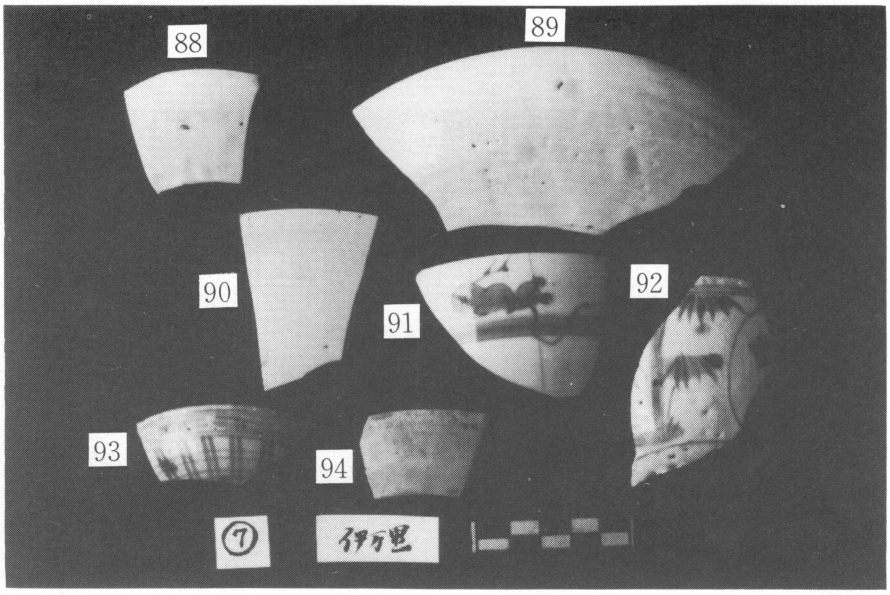


｛（☆）82～84→同一個体｝

P・L26

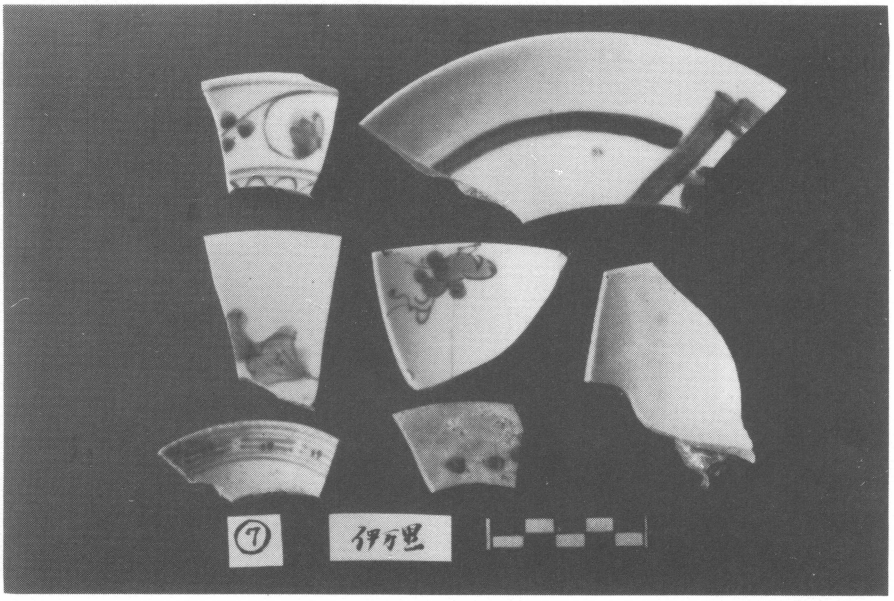
肥前磁器　　⊙17世紀以降

〔伊万里染付〕　　（皿・碗）



R_{18}Ⅱ上	R_{19}Ⅱ		
	R_{10}Ⅱ	R_{28}Ⅱ	R_{27}Ⅱ
X_{8}Ⅰc	R_{28}Ⅰc		

↓



〔鉄製品〕

（釘・錐？）

Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ

Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ | Y 8 Ⅱ

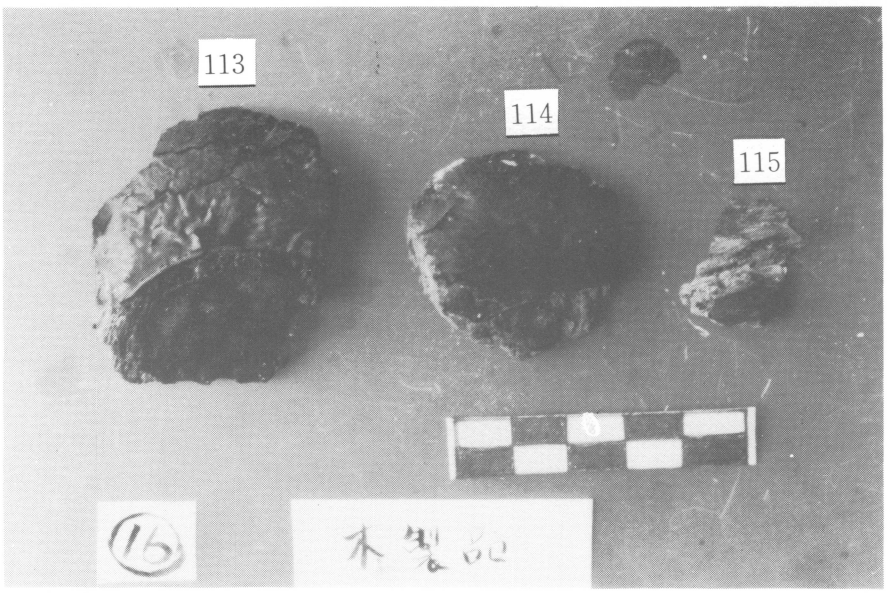
（釘・錐）

X 5 Ⅱ | X 5 Ⅱ | X 5 Ⅱ | X 5 Ⅱ | X 5 Ⅱ | X 5 Ⅱ

P・L28

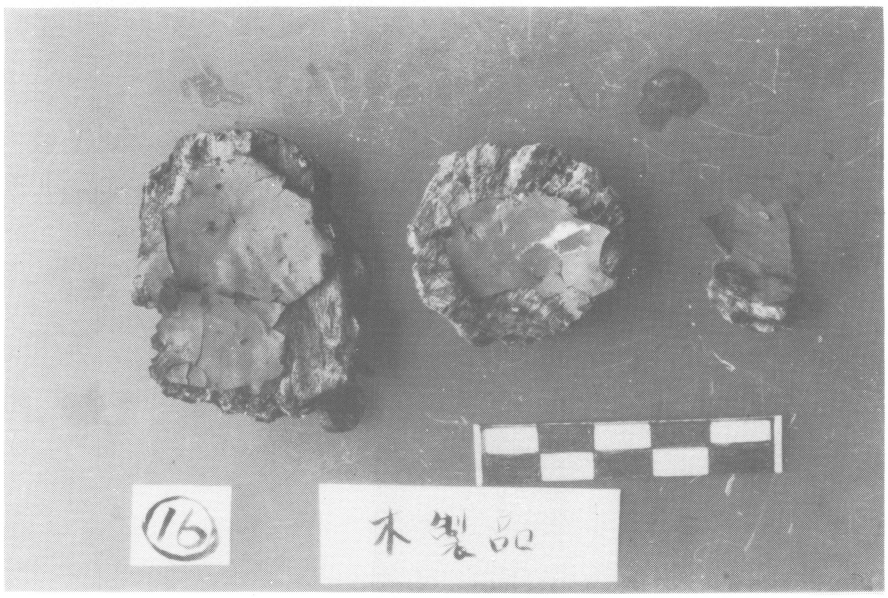
〔木製品〕

漆器碗



X_{11}Ⅱ	X_{11}Ⅱ	X_{11}Ⅱ

↓



昭和62年度琴湖岳遺跡発掘調査報告書

琴　湖　岳　遺　跡

○発　　行　青森県北津軽郡市浦村教育委員会

○発行月日　昭和63年３月31日

☆特別寄稿　豊　島　勝　蔵

○著　　者　新　谷　雄　蔵

○印 刷 所　㈲　西　北　印　刷